

特250

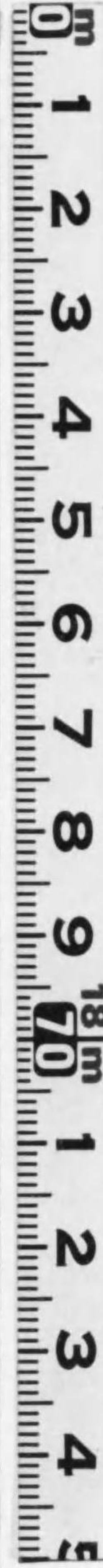
861

沖河港大観



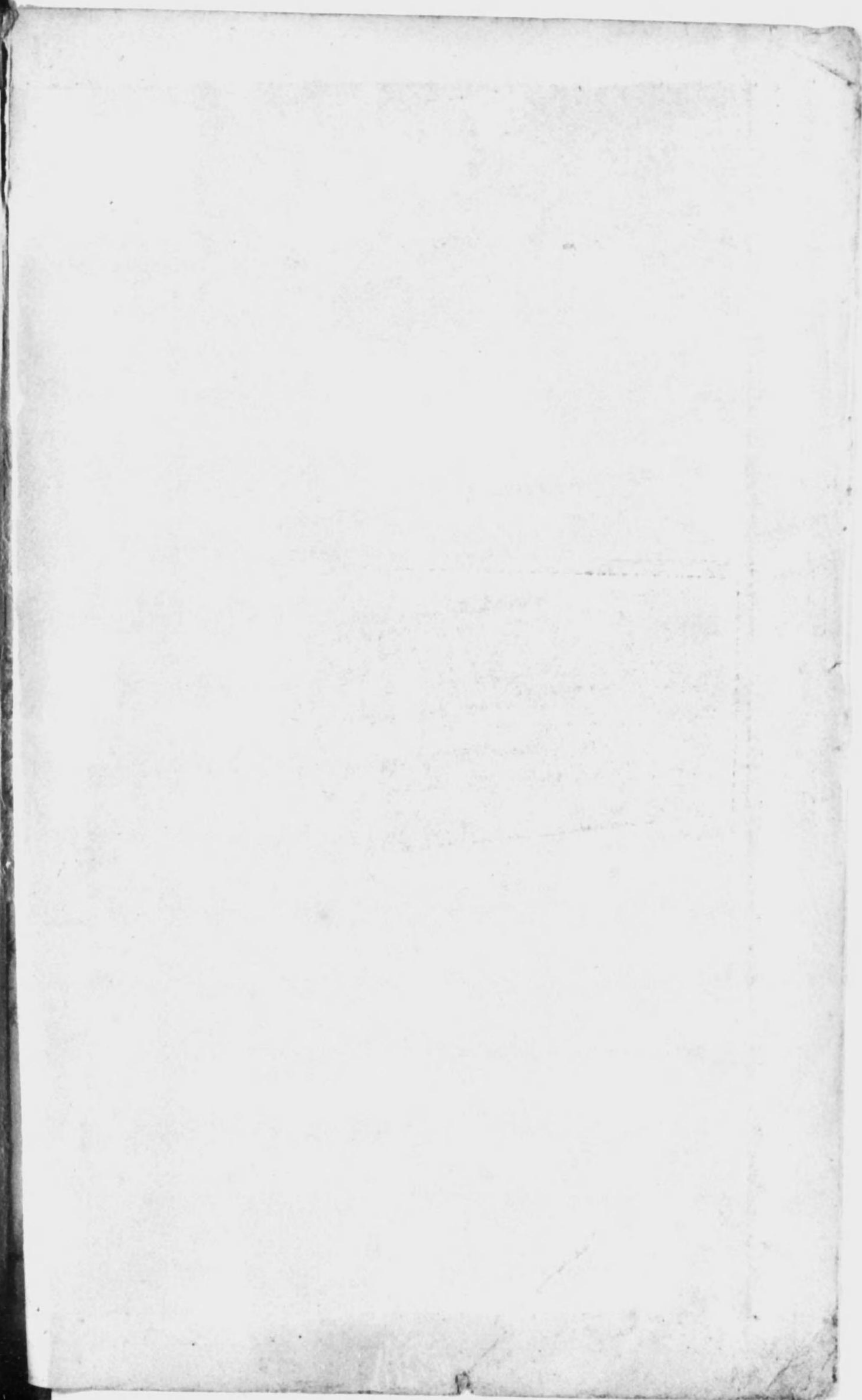
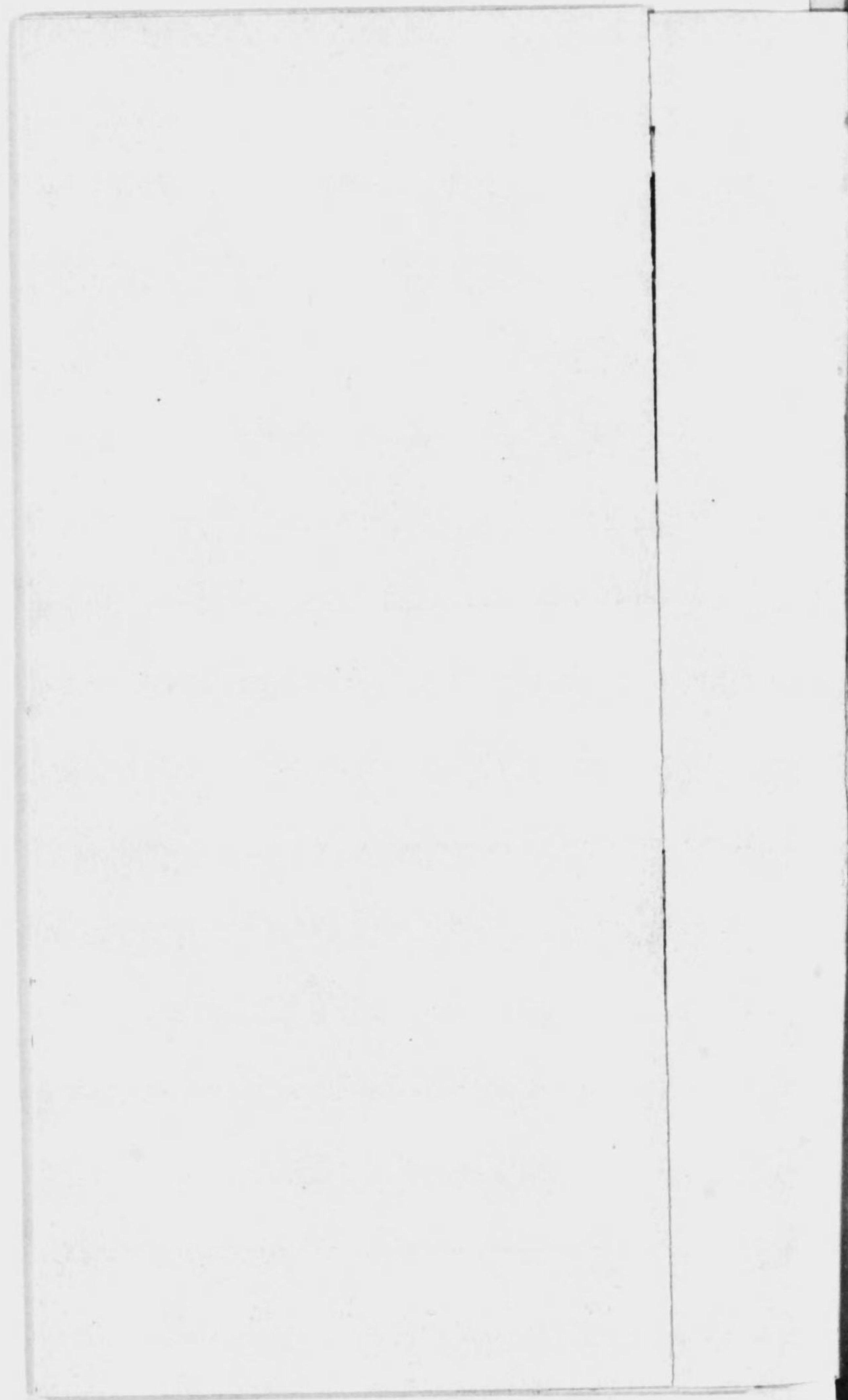
沖合より浦河港を望む

浦河漁業組合



始







浦 河 港 全 景



潮 見 丘 よ り 鱗 別 を 望 む

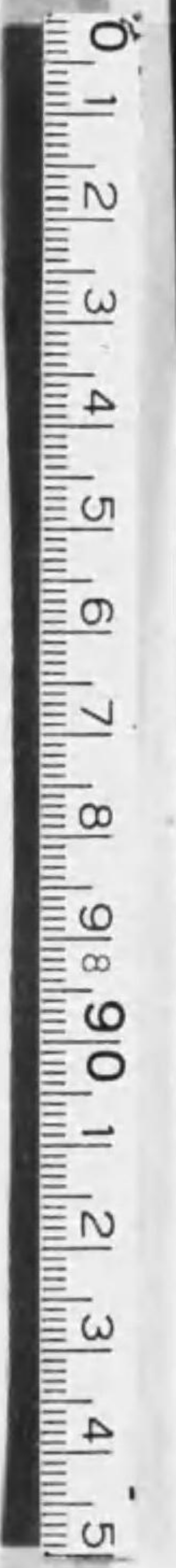


浦 河 港 全 景



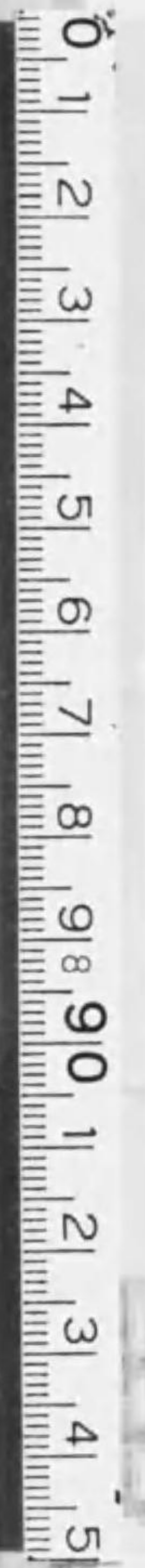
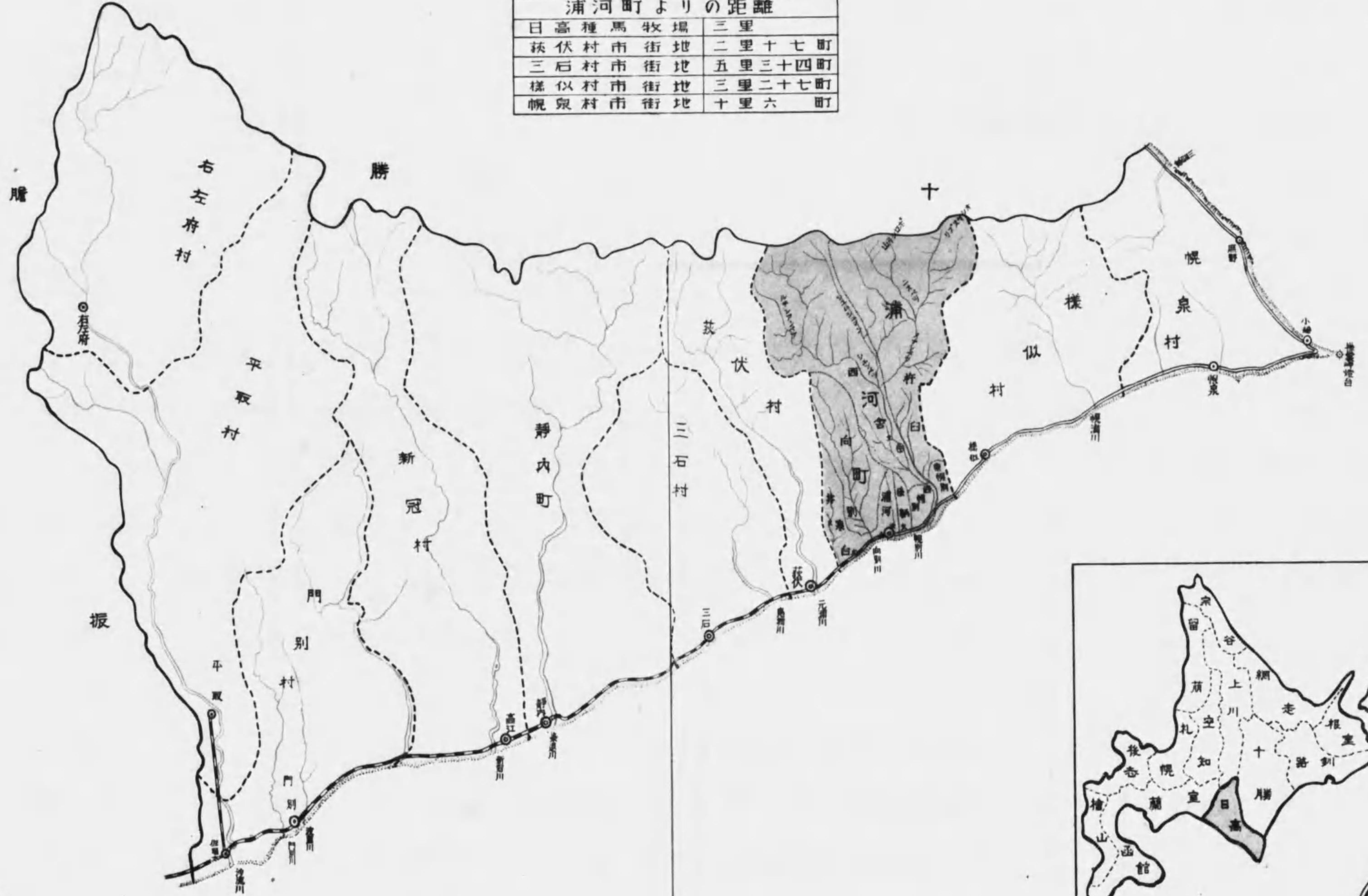
潮 見 丘 よ り 鱗 別 を 望 む

浦河町市街浦河港俯瞰圖



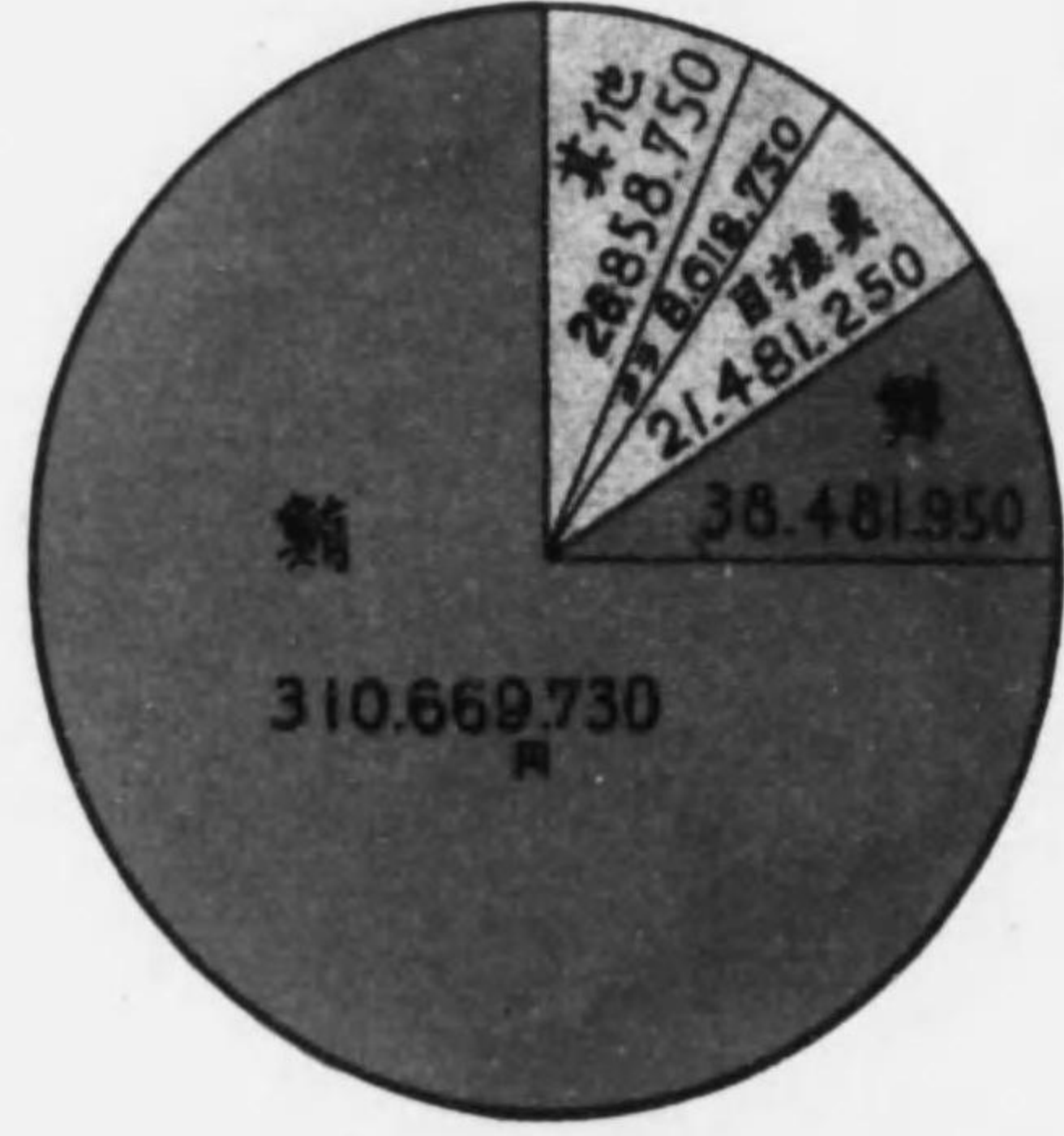
浦河町管内地図

浦河町よりの距離	
日高種馬牧場	三里
荻伏村市街地	二里十七町
三石村市街地	五里三十四町
様似村市街地	三里二十七町
幌泉村市街地	十里六町

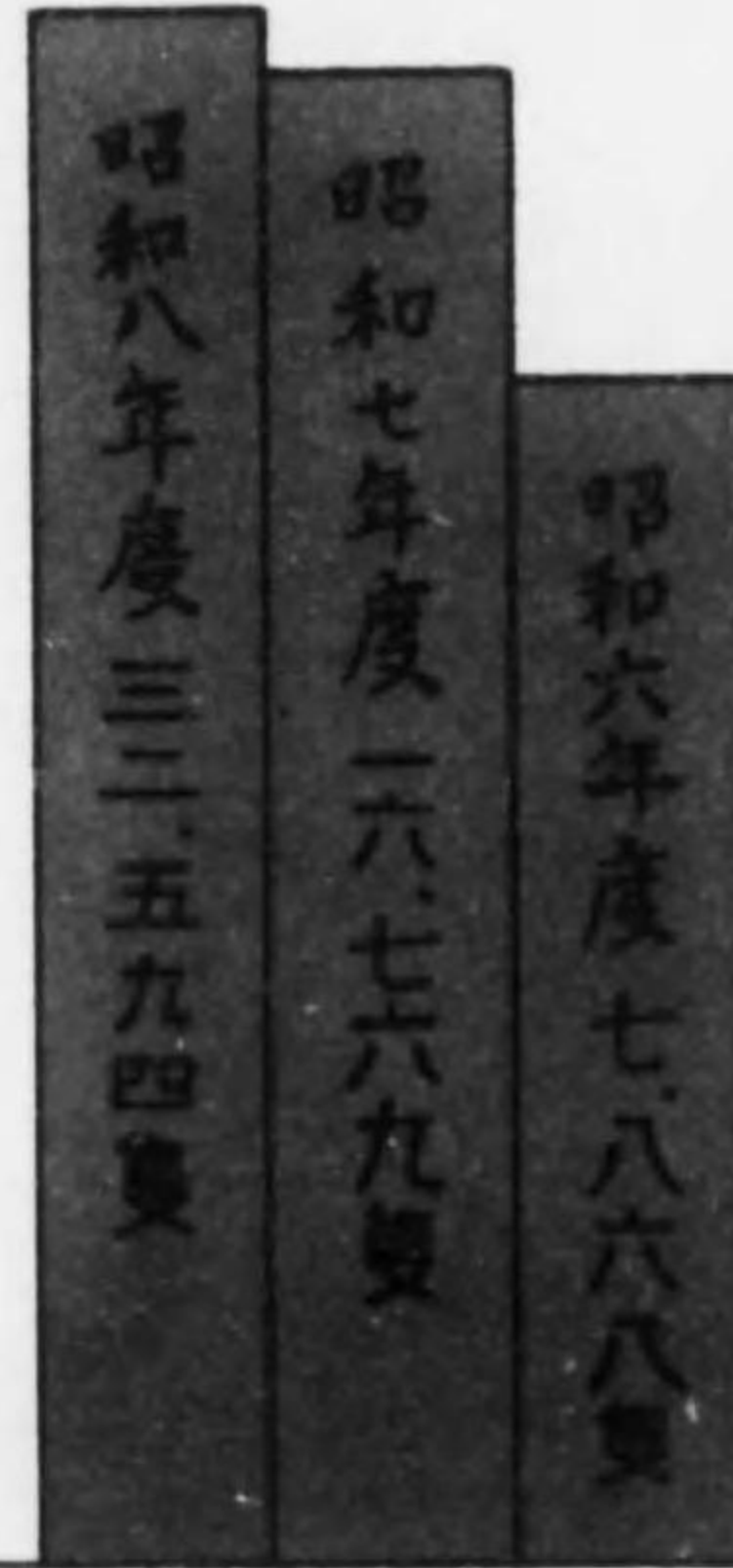


浦河魚菜市場漁獲物賣上及入港漁船比較圖

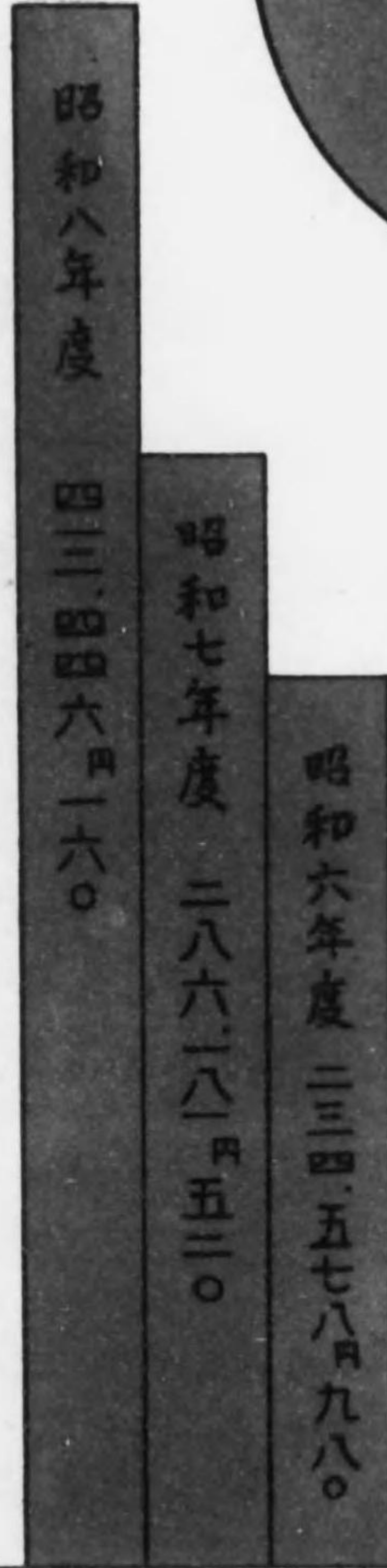
昭和八年度魚類別賣上高



各年度入港船舶數



各年度賣上高

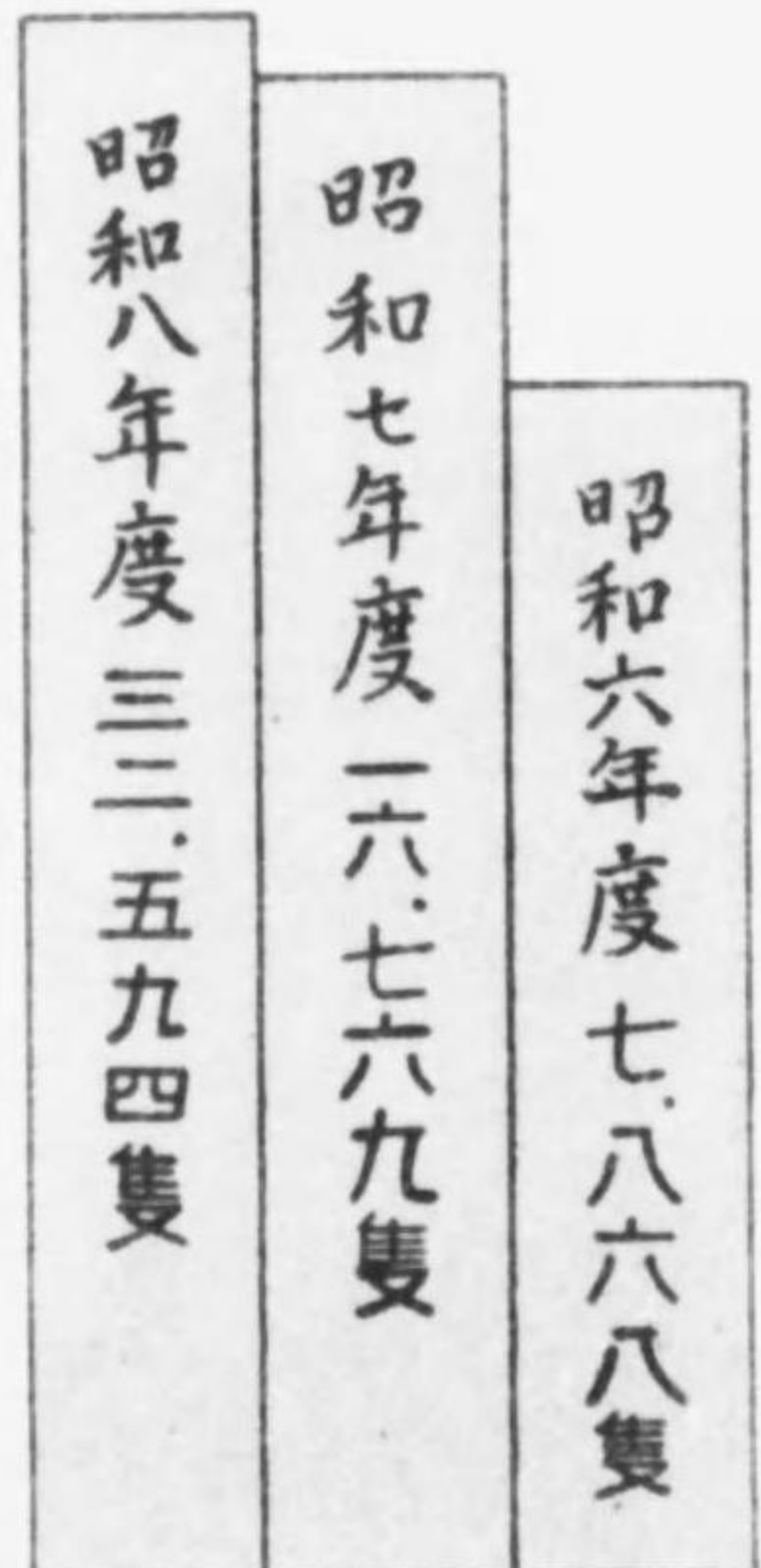


浦河魚菜市場漁獲物賣上及入港漁船比較圖

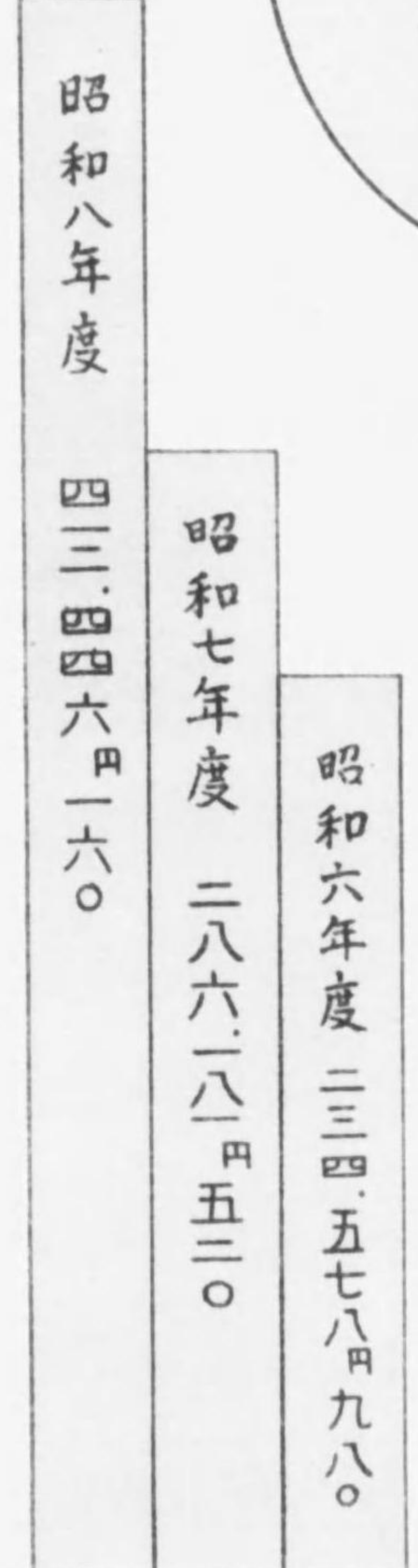
昭和八年度魚類別賣上高



各年度入港船舶數



各年度賣上高





長町河浦
氏榮丹荻



長麻女高日
氏郎次豐田前



役助町河浦
氏廣木鈴



長署察警河浦
氏都田山



長守看臺燈河浦
氏靜田吉



長所候測河浦
氏男道田北

南河魚菜市場魚類消費土高入基魚研出轉圖

昭和八年魚類消費土高



各年魚類消費土高

昭和八年魚類消費土高



浦河漁業組合役員



理事
村岸助治郎



理事
中村要藏



組合長
舩谷耕藏



監事
大野末藏



監事
廣木光五郎



浦河工商會頭
高木德治氏



日高水産會長
高津彌三氏



浦河救難所長
田中清三氏



浦河消防組頭
奧田惣兵衛氏



蛸空釣組合長
濱崎清藏氏



仲買組合長
東朝之氏



浦河漁業
組合職員

書記
小關一雄



仲買人
高木金次郎



釣取荷主
岡崎彌之吉



會計主
中江勝藏



荷受
畑山清



庶務
和田庄一郎



釣取助
丸山靜逸



浦河漁業
組總代

大石安太郎



木村秀重



春日多三郎



濱崎清藏



館吉之助



若林仙次郎



船越千代吉



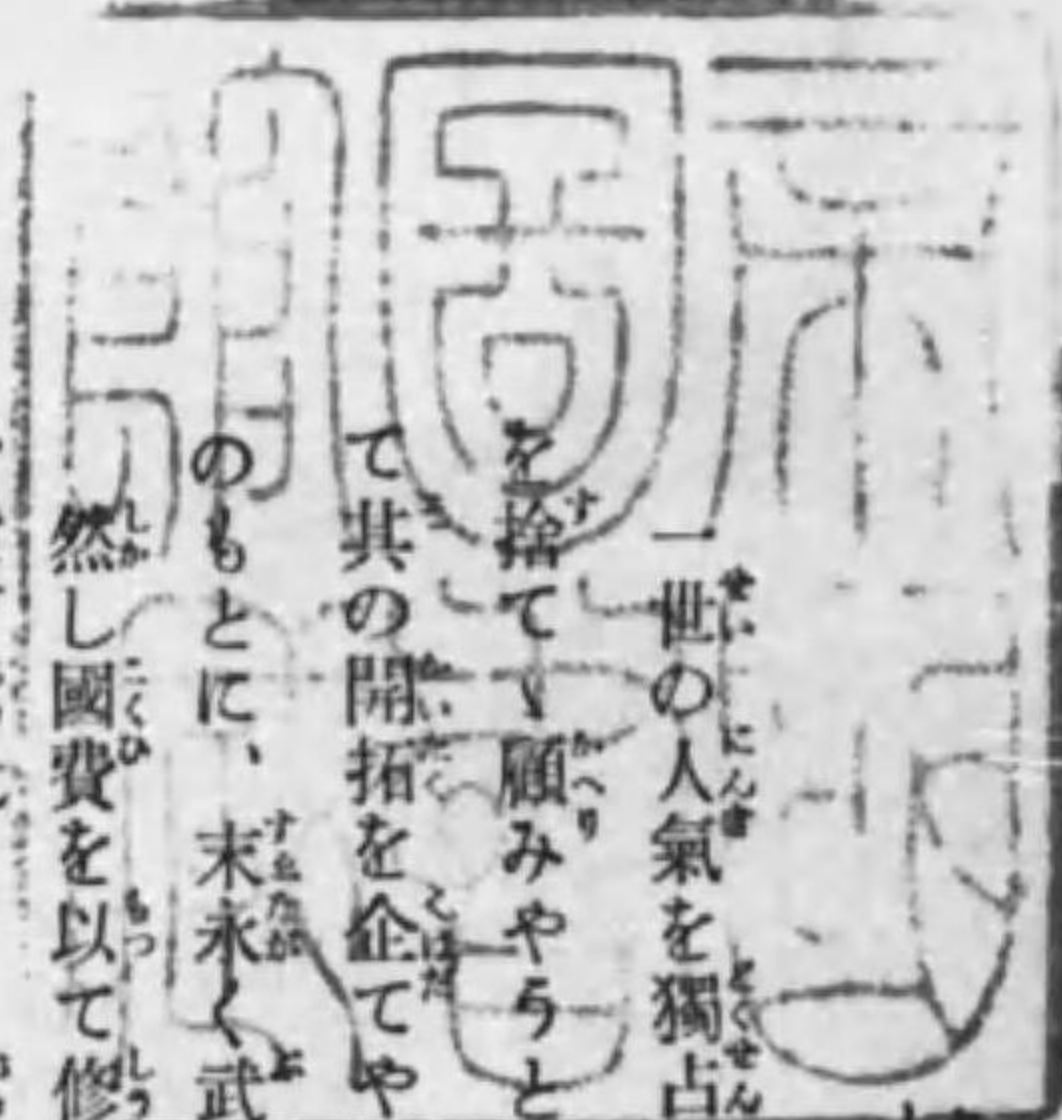
阿部幸次郎



畑中賢次郎



廣瀬清太郎



浦河港大観

はしがき

一世の人氣を獨占してゐる小唄の勝太郎にも、彼女自ら自己の力量を識らず、世間亦彼女の力を捨て、願みやうとせぬ時代があつたのと同じく、日高も随分長い間天與の恵澤資源を死蔵し、其の開拓を企てやうとせぬばかりか、時としては却てこれを隠蔽し、日高の爲めの日高てもとに、末永く武陵桃源の夢を貪らうとする、退嬰姑息の風さへ見受けられぬではなかつた。然し國費を以て修築された浦河港の完成は、過去の情勢に根本的變化を與へ、日高の富源即ち襟裳岬を中心とする沖合一帯の海田漁場は、今や全日本的に解放されやうとしてゐる。

もう一度勝太郎を引合ひに出すならば、世界の三大漁場と謳はれる日高沖合の海田は、浦河港の出現に依り、勝太郎の葭町進出にも擬らうべき、自己開發への第一歩を踏み出したのである。

情緒纏綿たる佐渡の民謡おけさ節は、人口に膾炙さるゝ事既に久しであるが、勝太郎の小唄



浦河發動機 漁船組合役員



組 長
阿 部 吉 要



理 事
石 川 昇 策



理 事
岡 本 吉 平



理 事
廣 木 光 五 郎



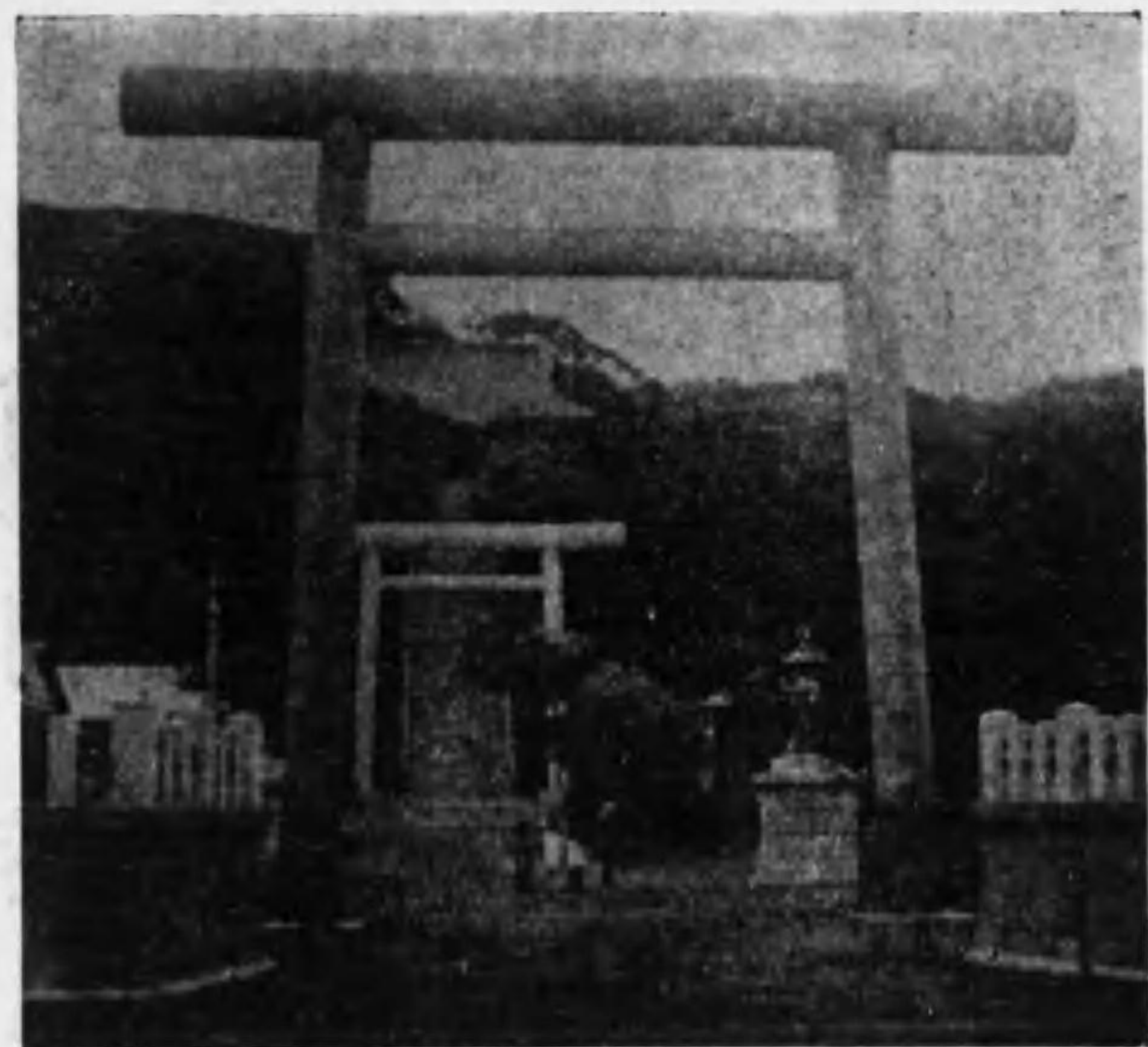
監 事
塚 田 庄 吉



監 事
長 崎 儀 作



理 事
石 橋 正 雄



浦河神社

術を通してよりよく、より広く喧傳普及せられたように、日高の漁場も亦港浦河を得て初めて天下の漁業家に広く解放せられたと云ふも敢て過言でない。小冊子「浦河港大観」は、日高の漁場と浦河港をよりよく、より広く紹介宣傳せんが爲めの樂譜であり、歌謡集である。天興の大漁場を開拓し、國富の増進を期する上に、よき手引きともならば、望外の幸せである。

郷社 浦河神社

郷社浦河神社は、浦河町の中央部大通三丁目位置し、潮見ヶ丘中腹の柏林を背に、浦河町の生命線とも評すべき漁港と、限りなき大海原



社司 山内春見氏

を俯瞰して南面する眺望の雄大な景勝の地に造營されてゐる。御祭神は、保食大神と大城國紀伊郡稻荷山に鎮座まします稻荷大神の御分靈を勧請奉齋したもので、讃岐國金刀比羅宮の主神にまします大神大物主命、並に安藝國嚴島神社の主神にまします嚴島姫命をも配祀し奉つてある。

享和元年渡島國松前郡福山仲町佐藤嘉右衛門氏の創立に係り當初は社格未定であつたが、明治八年に至り郷社と公稱、爾來郷社稻荷神社と稱し來つたが、昭和六年五月十二日を期し浦河神社と改稱、祭典は毎年新曆の九月十四、五兩日に舉行されてゐる。

社司は山内春見氏で、氏子總代は、奥田惣兵衛、高津彌三吉、村岸徳次郎、喜田貞吉、田口忠之助、池添政四郎の六氏である



日高支店



日高支店産課長 遠藤勝夫氏
 同上水産技手 桑原萬壽治氏
 同上工商係 小林修平氏

氣候は一般に溫暖で、夏季と雖も氣温八十五度を超えず、冬季の寒氣亦零下十四度を過ることは殆んど稀有に屬し、降雪量少く、正月に積雪を見ない歳も左迄珍らしくない。

奥羽三陸地方の海岸を船出すれば、否でも應でも日高の沿岸に到着するてふ潮流の關係上、和人の渡航定住は、相當舊い歴史を有するものと想像される。

現に管内平取村には、日本歴史上の人氣男源義經を祀る義經神社が在り滿洲事變以來「成吉思汗は源義經なり」



潮見丘より河浦港を望む



日高紀念館

舊くて若い日高

日高國は北海道の東南に位置し、北東は日高山脈を以て十勝國に隣りし、北西は膽振國に連り、南西は際涯なき太平洋に臨んで、延長四十四里の海岸線をなしてゐる。

管内の面積は三百二十二方里、即ち一千四十八萬六千三百五十七町歩で、北海道の全面積五千七百五十五方里に對し、百分の五を占めてゐる。

一帯に山岳丘陵が多く、農耕適地は僅か四萬八千町歩に過ぎないが、海岸線四十四里の沖合は、世界三大漁場の一として有名であり、山岳地帯には、千古斧鉞を入れざる森林が鬱蒼として連り、地下には金、銀、銅、水銀、クローム等の諸礦物を豊富に埋藏してゐる。

と斷する小谷部全一郎氏等の説を信奉し、祖先の雄大なる大陸經營に、國民的熱血を沸かす者の漸く多きを加ふると共に、沙流川の上流に面し、平取市街西北隅の丘陵地に栗林に圍まれて鎮座する義經神社に詣する義經黨も、日々少なからぬ數に上つてゐる。

明治二年蝦夷を北海道と改めて以來六十餘年、開拓使時代、三縣時代、道廳時代の三時代を経過して今日に至つた現在の日高國は、日高支廳の名のもとに七郡十ヶ町村（右左府村、平取村、門別村、新冠村、靜内町、三石村、荻伏村、浦河町、様似村、幌泉村）に區劃され、最近の日高支廳調査に據る人口戸數は、全管内を通じ世帯數一萬二千四百八十三、人口男三萬五千二百〇四人、女三萬〇九百九十三人、計六萬六千九百九十七人で、舊土人即ちアイヌは男二千四百九十三人、女二千七百六十三人、往時日高と言へば直ちにアイヌを聯想した日高も、今日ではアイヌの數全人口の一割に満たず、二十戸以



浦河町役場

上の集團的部落を爲すものとは殆んど稀れである。

年の生産總額は七百十萬四千八百六十三圓で、其の内譯は、農産二百三十九萬七千八百六十八圓、畜産二十七萬七千〇八十一圓、林産九十五萬五千三百五十七圓、水産二百九十七萬八千五百九十四圓、鑛産二十五萬八千三百七十九圓、工業二十三萬七千四百八十四圓、この内日高として、水産業と共に天下に誇るべきは畜産であつて、管内に新冠の御料牧場と、浦河町西舍村の日高種馬牧場、



浦河警察署

（農林省管轄）の二大公營模範牧場を有するだけに、總頭數一萬六千八百八十五頭の馬匹は孰れも一粒選りの駿馬揃ひで、特に競馬に興味を有する人々は、日高に入つて初めて待望久しかりし戀人に接した如き感を深うする、とは蓋し偽らぬ告白であらう。管内には佐瑠太、三石間六二、一杆の國有鐵道と、佐瑠太、平取間一三杆の私設沙流鐵道を

有し國有鐵道は昭和十年春までには、更に浦河町に延長される計畫で目下工事を急いで居り、海岸線に沿ふて東西に走る國道は、襟裳岬を迂廻して十勝國廣尾へ通じ、バス、小型自動車・貨物自動車等が晝夜の別なく疾驅してゐる。

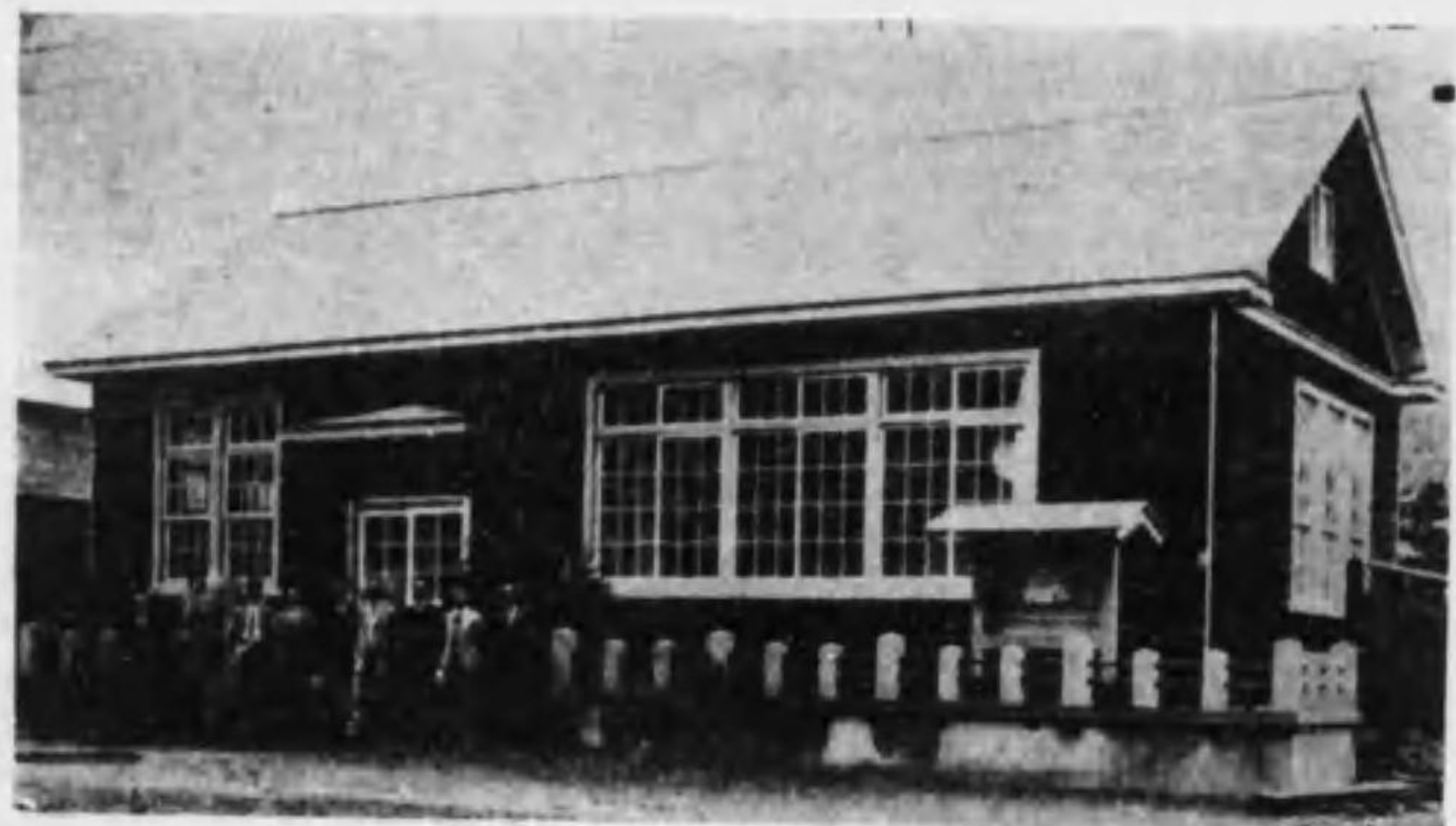
賑ふ浦河町

抑々我浦河は……と四角四面に開き直つて、浦河町の歴史を説き起す段になると、今を去る四百九十餘年前嘉吉の昔に遡らねばならぬが、松前の藩祖武田信廣公の蝦夷地統一の軍談は、一寸この大觀と縁が遠過ぎるから割愛、本町は東經百四十二度云々も紋切型に過ぎて無味乾燥だから省略、町の位置は巻頭附録の地圖に説明役を譲ることにする。

面積三十方里三九四、管内を南流する東幌別、向別、繪笛の諸川



浦河小學校



浦河稅務署

があつて、その流域に豊饒な農村を抱擁し、浦河港を中心に海岸線に沿ふて點在する漁村と相俟つて、海陸均衡のとれた生産豊かな平和境をなしてゐる。

浦河、井寒台、向別、西舎、杵臼、後頼、西幌別、東幌別と

村岸酒造店主 村岸徳次郎氏



村岸徳次郎氏の全人格は謙讓の二字に盡きてゐる。金龜城下彦根町を生地とする氏は江州人特有の手堅さを持ち、飽く迄も地味で、出張張つた風な所が微塵も無い。然し有り觸れた消極退嬰では無く、イザと云ふ場合は、容易に他の追隨し得ざる切れ味を見せる所に氏の本領が在り、眞骨頭が存する。浦河に居を構へたのが明治二十五年、以前上場所方面で漁業に従事した約十年間を加へると、六十七年の過去の大半は北海道で過されてゐる。二級選舉制時代町議に選ばれた事もあるが、近年は一切の公職を謝し、盆栽いぢりに餘念ない。然し地元長老の一人として依然重きを爲してゐる。

八ツの大字に別れ、一級町村制を施行したのが大正四年の四月、現在の戸数は農、商、工、漁、公務員其の他を合せ一千九百七十六戸、その内浦河港の連坦戸数は千數十に達してゐる。浦河町市街には町役場をはじめ

日高支廳、浦河警察署、浦河測候所、浦河稅務署、浦河營林區署、浦河森林事務所、浦河區裁判所、浦河燈臺、煙草專賣局浦河出張所、浦河郵便局、水産物検査所日高支所、農産物検査所浦河派出所

等の諸官公署が在り、港を去る三里の宇西舎村には農林省管轄の日高種馬牧場及び西舎郵便局、西舎巡查駐在所等が在つて、浦河町は名實共に日高の中心都邑である。

浦河町の産業的生産は農産、畜産、林産、水産、工業其の他を合し、年額百十餘萬圓に達してゐるが、其の過半を占むるものは水産で、而も水産の大部分は沖合漁業に依る水揚げ



浦河營林區署

である。

従つて浦河町の經營は、直ちに浦河港の經營を意味し、荻町長が昭和九年を起點として、新に立案計畫した諸施設の如きも、總て港の完備と繁榮を基調としてゐる。

町の新年度豫算は、歳入歳出總額九萬八千六百十三圓であつて、施設の主たるものを列挙すれば、

一昭和八年に於て立案した小都市計畫の遂行、二潮見ヶ丘自動車道路の開墾と住宅區域の設定、三市街の東端乳呑川を挟んで工場地區の設置、四浦河停車場(既定)より濱町に通ずる海岸道路の改良、五向ふ三年計畫で町の西端向別川尻の海岸二千坪を掘鑿し小船入淵を設け副港となすと共に其の附近一萬八千坪を埋立て荷置場倉庫住宅地を新設、六漁業組合附屬市場と既設埋立地間の海濱六千坪を埋立て生魚荷揚場及び共同販賣所に充當、七上水道を擴大し船舶給水に遺憾なきを期す

その他北海道拓殖銀行の支店新設を運動し金融の圓滑を期する一方、小學校の改築、町立病院の内容完備等であるが、兎に角漁港の飛躍的發展に並行し、茲一ケ年後には國有鐵道の開通を見やうとしてゐる浦河町は



浦河森林事務所



氏郎治助岸村 氏郎太甚木々佐 氏郎三由口谷



氏平長巢本 氏吉梅川谷 氏重秀村木



氏吉傳本山 氏郎太幾田小 氏松役山小



氏衛兵惣田奥 氏吉萬谷



氏吉三彌津高 氏吉謙 氏助之忠口田



氏郎次定田濱 氏郎五光木廣 氏郎五吉針大

浦河町々會議員



浦河區裁判所

北海道隨一の好景氣地として旅館は常に満員、市中には家屋の新築で多
 忙な大工さんの槌の音が、終日響き渡つてゐる。
 尙参考の爲め、町公職者の資格と氏名を挙げれば次の通りである。

浦河町公職者一覽

町會議員

廣木光五郎、堺謙吉、高津彌三吉、谷萬吉、大針吉五郎、田口忠之助
 奥田惣兵衛、濱田定次郎、佐々木甚太郎、木村秀重、山本傳吉、本巢
 長平、小山役松、小田幾太郎、谷口由三郎、村岸助治郎、谷川梅吉。

區長

村岸徳次郎、池添政四郎、松田治兵衛、田中竹次郎、松山巖、永田宇
 吉、野畑幸次郎、坂本馬藏、大野末藏、笠松長松、齋藤八郎、福岡松

常設委員

藏、中脇兼吉。
 佐々木甚太郎、小田幾太郎、谷川梅吉、田口忠之助、永田宇吉、白濱長次郎、森熊藏、佐藤安太
 郎、中江勝藏、本巢宅次郎、小田喜代藏、田中清三。

統計調査員

田中清三、小關一雄、久保田憲一、坂本米藏、小田要太郎、谷
 口周一、大下丹市、松山成一、佐々木甚太郎、櫻田重太郎、大
 野末藏、足利松生、山本傳吉、白濱長次郎、村佐太郎、福岡
 峯治、松田薫、辻志平。

自作農創設資金貸付調査委員

本巢長平、小山役松、濱田定次郎、山本傳吉、田中
 岸藏、辻芳助。

家屋税調査委員

木村秀重、福岡松藏、谷万吉、奥田惣兵衛、江端
 丹次郎、高津彌三吉、室田末吉、永田宇吉、森熊藏

臨時漁港調査委員

谷万吉、奥田惣兵衛、西口右平、舛谷榊藏、高津
 彌三吉、堺謙吉。

學務委員

山本傳吉、大針吉五郎、谷口山三郎、小田幾太郎、西
 岡貞吉、日田安次郎、吉川勘平、足利平、池田庄太郎



浦河測候所



浦河燈臺

浦河町役場吏員

町長 荻丹榮。助役 鈴木廣。収入役 工藤以直。庶務主任 飯田久太郎。戸籍、兵事主任 加藤善藏。財務主任 梅田知。教育、社會統計主任 森岡喜作。土木主任 倉本武。勸業主任 杉本強。尙吏員總人員は左記の如く十八名。
町長(一)助役(一)収入役(一)書記(六)書記補(五)財産監視(一)水産監守(一)臨時技術員(二)

浦河の氣象

日高は、北海道で最も氣候の溫和な所として舊くから知られてゐるが、昭和二年一月から觀測を開始した浦河測候所の記録は、寔によく此の言ひ傳へを裏書きしてゐる。

いま、氣溫、風等の主な氣候要素に就て略記すれば次の如くである。
氣溫 先づ氣溫に關する表を以て示せば、

氣溫表 (度目は總て攝氏、↑印は氷點下なるを示す)

平均最高氣溫	平均最低氣溫	平均氣溫	最高二十度以上日數	最低十度以下日數	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年		
↑3.5	↓0.3	↑1.6	↑6	↓6	六日	五日													
↑4.0	↓0.6	↑1.7	↑7	↓5															
↑4.1	↓0.1	↑2.0	↑7	↓3															
↑4.3	↓0.3	↑2.0	↑7	↓3															
↑4.5	↓0.5	↑2.0	↑7	↓3															
↑4.6	↓0.6	↑2.0	↑7	↓3															
↑4.7	↓0.7	↑2.0	↑7	↓3															
↑4.8	↓0.8	↑2.0	↑7	↓3															
↑4.9	↓0.9	↑2.0	↑7	↓3															
↑5.0	↓1.0	↑2.0	↑7	↓3															
↑5.1	↓1.1	↑2.0	↑7	↓3															
↑5.2	↓1.2	↑2.0	↑7	↓3															
↑5.3	↓1.3	↑2.0	↑7	↓3															
↑5.4	↓1.4	↑2.0	↑7	↓3															
↑5.5	↓1.5	↑2.0	↑7	↓3															
↑5.6	↓1.6	↑2.0	↑7	↓3															
↑5.7	↓1.7	↑2.0	↑7	↓3															
↑5.8	↓1.8	↑2.0	↑7	↓3															
↑5.9	↓1.9	↑2.0	↑7	↓3															
↑6.0	↓2.0	↑2.0	↑7	↓3															
↑6.1	↓2.1	↑2.0	↑7	↓3															
↑6.2	↓2.2	↑2.0	↑7	↓3															
↑6.3	↓2.3	↑2.0	↑7	↓3															
↑6.4	↓2.4	↑2.0	↑7	↓3															
↑6.5	↓2.5	↑2.0	↑7	↓3															
↑6.6	↓2.6	↑2.0	↑7	↓3															
↑6.7	↓2.7	↑2.0	↑7	↓3															
↑6.8	↓2.8	↑2.0	↑7	↓3															
↑6.9	↓2.9	↑2.0	↑7	↓3															
↑7.0	↓3.0	↑2.0	↑7	↓3															

最高氣溫 三〇、三度 昭和三年八月二十日
最低氣溫 一四、八度 昭和二年二月四日

即ち月平均氣溫は、八月が最も高く二月が一番低い。併し酷暑の候と雖も、氣溫が二十五度(華氏 七十七度)以上にする日數は十三を普通とし、嚴寒の候と雖も、氣溫が氷點下十度を下る日數は十二を以て平年とし、兩者共にその數が極めて少い。

昭和三年の夏三十度三分(華氏八十六度五分)に昇り、昭和二年の寒中に氷點下十四度八分に下つたのが、浦河に



浦河郵便局



省線道浦河延長工事入式

記録は、昭和三年十一月二十二日の暴風で、三十二米一に達してゐる。この風速は、普通に用ひられる風の階級内に於ける最上級に属するものである。

又毎年六月から九月迄の間は、一般に東寄りの風が多く、其の他の期間は、西寄りの風が卓越してゐる。

由來冬期間は、優勢な低気圧が屢々本道附近を通つてオホツク海に出で、一方滿蒙方面に高気圧が顯著に發達する爲め、北日本一帯に強烈な西乃至北西の風が吹き續く。又夏期には北太平洋に高気圧が蟠居する爲め、日本海を通つて本道に近づく低気圧は、本道附近に北東乃至南東の暴風を齎らす。前掲の表は必ずしも浦河地方の風の穩かな事を語つてゐないが、併し夏の「ヤマセ」冬の「カミカゼ」は北海道共通のもので、特に浦河だけ風が強い譯ではないのである。

於ける今迄の最高及び最低の記録であるが、之を函館の最高三十三度五分、最低氷點下二十一度七分、札幌の三十五度五分、氷點下二十八度五分、旭川の三十五度九分、氷點下四十一度〇分、根室の三十二度一分、氷點下二十二度九分等に比較すると、最高記録に於ても可なりの差があり、最低記録に於ては殆んど同じ北海道と思へぬ程の開きを示してゐる。

以上の諸數字が物語つてゐる如く、浦河地方の気温は四季を通じ其の變化極めて少く、甚だ穩かである。

風 風の表は風速の月平均値、暴風日數其他を示したものである。
 風速は一秒間の値、最大風速が十米を超えた日を暴風日と稱する

平均風速	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
暴風日數	六	五	五	四	三	三	二	三	三	四	六	六	四
最風向	北	北	西	西	西	東	東	東	東	東	西	西	西

風速の極値 三二、一米 (昭和三年十一月二十二日)

即ち風速は、冬期に於て強く、夏期は概して弱い。(暴風日數も之れに並行してゐる) 風速の最大

雪 浦河は本道中で最も雪が少い。昭和三年一月七日に、五十二種（一尺七寸）積つたのが今日までの最深記録であつて、普通の年の最深は二十五種（八寸）程度である。昭和五年の如きは僅か十三種（四寸）以上には達しなかつた。根雪期間も短く十二月下旬に始まり、翌二月中旬に終るのを例とする。従つて大風雪、吹雪等も冬期間を通じ數回を數へるのみで、北海道としては殆んど無いと言つてよい位である。

初雪は平年が十一月三日、最も早い年で十月二十八日、終雪は平年が四月二十五日、最晩が五月三日である。



浦河港

霧 北海道南海岸一帯の海霧は世界的に著名なものであるが親潮が襟裳岬を洗つて南下する關係から、浦河も晩春から夏期にかけてこの濃霧に襲はれる。然し襟裳岬附近及び釧路、根室地方程猛烈なものではなく、夕方から曉方にかけて襲來し晝間は霽れるものが大部分で、夜間無風で陸風が相當吹き出す時は



船入湖

海霧の期節には、月のうち約二十日間を曇天のもとに過さねばならないが、春秋の二期には逆に約二十日間の晴天に恵まれ、従つて日照時間（太陽の直射する時間）も自然多く、年を通じ可照時間に対して四三%を示し、春秋二期には日量五五%にも及んでゐる。

沿岸は却て霽れる場合が多く、二十四時間を通じて霽れ間を見せぬ事など稀有である。霧の日數（視界千米以内のもの）は一年を通じて五十日前後であるが、最も多い月は七月で月の半を占め、視界百米以内のものは、四季を通じ僅か數回に過ぎない。其他 浦河地方は、六、七月の海霧期節を除くと大體に於て乾燥晴天の日が多く、年を通じて曇天の日（雲量八〇%以上の日）は約百七十日程で、晴天日數（雲量八〇%以下の日）約二百日を數へる事が出来る。

港の出来るまで

その地積の廣大さに於ては、昭和日本の持つ實力を以てすれば、友邦滿洲國の助成開發の如きは、明治初年に於ける我等先人の北海道經營に比し、遙かに容易な國民的事業と謂ふべく今日滿洲國の前途に對し悲觀説を懐く一部論者の如きは、極寒原始の蝦夷地を開拓して、美田良圃縱横に連る今日の北海道たらしめた先人の堅忍勞苦に對し、正に慚死すべきであつて、一浦河港を竣功せしめる爲めにも、實に過去五十年間に亘る血と涙の奮闘史が秘められてゐるのである。

浦河港の修築計畫は、遠く明治初年開拓使時代からの懸案で、同二十年頃には具體的調査が進められ、三十八年から九年に掛けては杉野道應技師の手で二度目の調査が行はれた。此の頃から浦河町民の港灣



浦河港起工式



西忠義翁

熱は勃然として起り、時の日高支廳長（當時は浦河支廳と稱す）西忠義翁（第八師團長西中將の父）をはじめ、地元元老塚忠助翁その他有志が夫々陣頭に起つて漁港期成同盟會を組織し、各種産業團體を糾合して年々委員代表者を上京せしめ、政府に請願陳情する一方、道廳當局に浦河漁港修築計畫の立案を迫る等、不屈不撓の猛運動を續くる事十餘年、大正六年には漸く道廳の手に於て、浦河港の精細設計が行はれる所まで漕付けたが、未だ機熟せず前途に曙光を認



日向自動車株式會社 專務取締役 出口慶次郎氏

氏は現に三石村歌笛で手廣く店舗を經營してゐる兵庫縣人出口官二郎氏の五男として三石港に生れた生粋の日高兒、早くから日高の自動車業界に身を投じ、盛衰興亡の激しかつた其の中を巧みに切り抜け、昭和六年には最も困難とされてゐた乗用自動車業の併合統一を計つて日向自動車株式會社の創立に成功し、引續きその專務取締役たるの外、獨力を以て貨物自動車、郵便車等をも經營、三十五歳の壯齡を以て既に牢固たる地歩を實業界に築き、多幸なる明日を約束された浦河中堅人物の一人として、將來を囑望されてゐる。尙氏は衆望を擔ふて北海道自動車協會理事、浦河町青年團第一分團長等に推され公私共に目覺しい活動を續けてゐる。

むるには至らなかつた。

然し町民は猶も屈せず撓まず、當時の日高選出道會議員堺頼吉氏を筆頭に、田中仙次郎、高木徳治、高津彌三吉、先代奥田惣兵衛、西口右平、小林壽作、奥山千春、鎌田九平、北川貞七氏等の重立者が一致團結、浦河全町民と共に力を協せ、悲壯な意氣を以て決死的努力を續けた結果、笠井信一



浦河港内



故 堺 忠助 氏

長官時代本道拓殖計畫促進の計を樹つるに當り、伊藤道應技師を派し四度び調査研究を遂げしめ、大正十年に及び漸くの事で浦河港修築工事に着手、其の後中川長官が北海道第二期拓殖計畫を樹立するに及び殘程全部を計畫中に編入し、第二期拓殖計畫分五十萬八千餘圓を加へ、總工費百四十一萬餘圓を以て道應技師中村廉次氏黨工のもとに工事を進め、



の 一 部 (一)

昭和五年三月巻頭掲載附録俯瞰圖の如く見事に竣功を告げた。

星霜の移り變ると共に、健忘症な人間の通弊として、地元町民中にも漸く先輩の辛苦奮闘の功を忘れやうとする傾きがあるが、潮見丘上に立つて榮え行く浦河港を觀望するにつけ、先人の超打算的努力の數々が今更の如く想起され、感謝感激の情に堪えざるものがある。

浦河漁業組合

浦河漁業組合は明治四十年九月に創立され、現在は浦河町在住の漁業者二百四十三名を以て組織されてゐる。

いま組合員を業態別に分つと發動機船漁業者二十四名、章魚空釣業者三十六名、昆布、銀杏草採取業者二百十三名と云ふ事になるが、此の中には兼業者も尠くない。



(一) 浦河内の一

議決機關は組合員の中から選出した十名の總代と、組合役員
 即ち組合長一名、理事二名、監事二名を以て構成され、その氏
 名は次の通りである。

〔組合長〕 舛谷辨藏。〔理事〕 中村要藏、村岸助治郎。〔監
 事〕 廣木光五郎、大野末藏。

〔總代〕 大石安太郎、春日多三郎、畑中賢次郎、濱崎清藏、
 阿部幸次郎、船越谷千代吉、館吉之助、若林仙次郎、木村秀
 重、廣瀬清太郎。

組合の事業としては、組合の所有する昆布、銀杏草、海栗、
 海苔、北寄貝、海鼠、鱒刺網、贻貝等八種の専用漁業權を組合
 員に行使をなさしむる外、浦河、井寒台の二ヶ所に於ける附屬
 魚菜卸賣市場の共同販賣事業、幌別川鮭人工孵化事業（毎年四
 百萬粒を孵化放流す）漁業資金貸付事業（八年度貸付金額二萬
 圓）漁具購買事業（八年度の金額一萬八千圓）等が主なもので

浦河港修築功勞者



故小故林壽作氏 故中田仙次郎氏 故奥田惣兵衛氏



故鎌田九平氏 界頼吉氏 西口右平氏



高木德治氏 高津彌三吉氏 奥山千春氏

昭和八年度に於ける豫算は、一般会計に屬するもの收支總額一萬一千三百七十七圓、特別會計に屬するもの、中、浦河魚菜卸賣市場の分收支總額四萬九百九十四圓、井寒台魚菜卸賣市場の分收支總額一千五百八十四圓、幌別川鮭人工孵化場經費二千三百圓、漁業資金貸付事業費一千八百圓、購買事業經費五千七百七十圓が計上されてゐる。

尙浦河漁業組合の職員は
 〔書記長〕 小關一雄 〔書記〕 (會計係主任) 中江勝藏 〔書記〕 (鈎取、荷主口座係) 岡崎彌之吉 〔書記〕 (仲買人口座係) 高木金次郎 〔書記〕 (鈎取助手) 丸山靜逸 〔書記〕 (庶務係) 和田庄一郎 (荷受係) 畑山清 〔井寒台市場勤務書記〕 岩船正次郎の八名である。

浦河發動機漁船組合

浦河在住の發動機漁船業者二十四名は、同業者間の親睦を圖り、線業上の協定、出漁中遭難し若くは線業中漁具を流失した



浦河港内

者に對する救助、及び漁具の貸付等を目的として、浦河發動機船漁船組合を組織し、目的の達成を期してゐる。

組合員は之れを甲種即ち地元組合員と、乙種即ち漁期中に限り便宜上組合に加入する短期組合員との二種に分ち、入會金は甲種組合員二十圓、乙種組合員は毎年々度始めに於て之れを協議決定する事になつてゐる。

此の他昆布採取業者を以て組織する昆布會、章魚空釣業者を以て組織する章魚空釣組合の二つがあり、前者は外谷樹藏、後者は濱崎清藏がそれぞれ會長として、同業者間の統制に當つてゐる。



の 一 部 (三)

帝國水難救濟會浦河救難所

帝國水難救濟會浦河救難所は、救助艇海王丸(十噸)の外救助船一艘、救命銃一挺、救命器、救命

浦河消防組頭 奥田惣兵衛氏



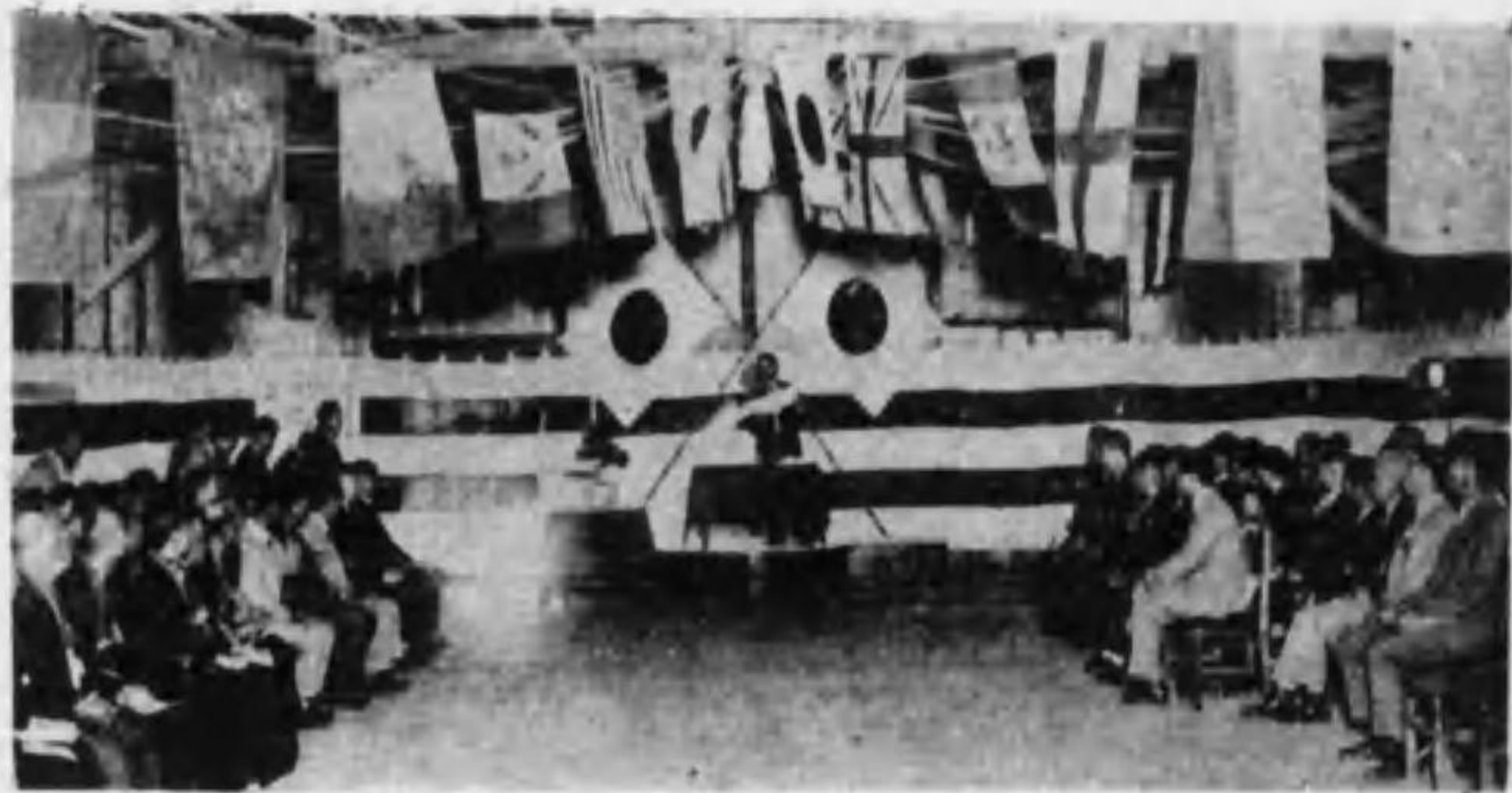
奥田家は浦河に於ける舊家の一である。氏は長野縣豊科町に生れ岡村家から迎へられて三代目の奥田惣兵衛を襲名、漁業部米穀雜貨油類を主要營業品目とする商店部等の自家營業の經營に當る傍ら株式會社日高運送社長、日高自動車株式會社取締役等幾多の會社に關係し、公職としては消防組頭の外浦河商工會副會頭、浦河信用組合理事、浦河稅務署管内所得稅營業收益稅調査委員、町議、常設委員等を兼ね、地位、聲望、才幹共に兼ね備はる浦河町の指導的人物である。昨年の後厄に於てすら諸般の營業は好調の一路を辿つたのであるから四十四の歳を迎へた氏今後の活躍は町の發展と並行し刮目に價するものがある。

胴着、浮輪、ロープ、碇其の他救助道具一切を設備し、田中所長以下左記職員を以て組織され、一旦有事の際に臨み遺洩たきを期してゐる。

(所長)田中清三(救助長)中村要藏、小關一雄、館吉之助(看守長)石川昇策(組長)七名(副組長)七名(看守)三名(救助手)五十名。

水産物検査機關

北海道廳では、水産業就中水産製造業の振興發展を圖り、製品の統一向上を期する目的を以て、



浦河港竣工式



浦河検査員派出所主任は技手清水



日高にも浦河町日高支廳内に、其の日高支所があり、四ヶ所の検査員派出所と十六ヶ所の検査員駐在所を常置して、日高國一圓を管轄し、昆布、乾製品、魚粕、魚油、海藻、酢鮓、鰯、鹽藏品、魚卵製品等二十七品目に亘る各種製品の検査を勵行してゐる。

札幌市に北海道水産物検査所を置き、全道十四支廳管内には各々之れが支所を設け、更に其の下に検査員派出所及び検査員駐在所を設置してゐる。

李次郎氏で、清水氏の下に技手小田二郎氏が在勤し、夫々製品の改善に鋭意精勵してゐる。
 此の外浦河町には全日高水産業の統制機關として、日高水産會（會長高津彌三吉氏）日高漁業組合聯合會（會長高津彌三吉氏）の二團體が在る。



昆布採取

浦河港を根據地として、日高沖合の漁場に出漁する漁船の漁獲物は、總て浦河漁業組合の經營に係る浦河魚菜卸賣市場に出荷され、市場所屬仲買人の手を以て敏速安全に取り引され、浦河發動機漁船組合に乙種組合員として加入してゐる外來船主に對しては、一般組合員同様二歩の歩戻り金を交付してゐる。
 一旦市場所屬仲買人の手に移つた鱈、鮭、昆



の實況

木等の漁獲物は、全國的に最も信用厚き冷蔵船に賣却され、鮮魚として東京、横濱の市場、或は遠く熱田方面へまで冷蔵移出されてゐるが、昨年の十一月十五日には浦河を西に距る五里の地點、三石驛まで國有鐵道の日高線が延長されたので、本年は浦河、三石間を貨物自動車で聯絡し、列車便に依つて道内消費地、及び本州方面へ移送される數量も少なからざるべく明春五月頃までには、目下工事を急ぎつゝある浦河町までの鐵道布設も竣功を告げ、船入瀬北部埋立

地に浦河驛の開設開通を見た時は、愈々貨車輸送が盛んとなり、海陸相俟つて鮮魚の移出は益々至便とならう。
 従つて販路の擴張、魚價の維持向上に資する所が少なくないであらうと想像されてゐる。

日高民報社長 小林哲太郎氏



久しく浦河漁業組合長として日高の水産界に不滅の功績を残した小林壽作氏の長子として明治十五年三石村に生る。浦河小學校、函館中學校を経て同三十六年上海の東亞同文書院商科に學び、三十九年同院を卒業するや奉天の商館に勤務、四十二年歸郷後は浦河漁業組合書記として組合長たる先考を援け、大正十三年二月嚴父の没すると共にその後を襲ふて組合長に就任、傍ら現日高民報の前身日高新聞の經營を兼ね、昭和二年組合長辭任の後には日高民報社の經營に専念、日高の言論界を指導以て今日に及んである。

純情そのものゝ如く、大いに飲んで大いに笑ふ快男兒、その學歴と云ひ經歷と云ひ、當然第一線に乗出し日高を背負ふて立つ可き人材である。

鰯、鮭、梶木以外の鰯、目拔魚、柔魚等も、鮮魚の儘冷蔵船積みとして消費地の市場へ搬出されてゐるが、一部は仲買人の手で製造加工され、東京を中心に奥羽地方一帯及び信州、北陸、静岡方面へ出荷されてゐる。

製品の代表的な品目は

目拔魚、粕漬、鱈、新鱈(首切鹽鱈)粕漬、開鱈、鮭、粕漬、開鱈、明太、章魚、酢章魚、乾章魚、削章魚、鱈、鮭、鹽鱈、鹽鮭、柔魚、鰯。

この外に、沿岸の淺海で漁獲される雜魚を原料として製造される各種製品も少くないが、其の大



東朝之氏

町會議員 濱田定次郎氏



部分は地元及び日高管内で消流され、僅かに土産品として他へ持ち出されるに過ぎない。詳細は後掲、加工製品一覽表の通りである。

市場所屬仲買人のうち、現在冷蔵船取扱及び製造加工業に従事してゐる者は十二人で、この外に地元五十集人が三十餘名居り、孰れも信用技術共に充分信頼に値する者のみで、是等仲買人は、今後更に廣く確實な取引を先きを全國各地に求め、製品の販路擴張を期したいと希

石川縣川北郡竹橋村に生れ壯年の頃青雲の志を懷いて渡道、明治三十六年から浦河町に於て牧畜業を經營、現に競走馬の生産者として全國的に著聞し過去三十年間に亘る馬産界への貢獻は大なるものがある。

傍ら洋品小間物商を營み、前年浦河海陸運輸株式會社の創立さるるや擧げられて社長となり、港浦河の繁榮と直接的交渉を有する同社の經營に精勵してゐる。

人為温厚にして寡黙、凡てを肚でできめると云つた親分肌の人柄である。前回の選舉には衆望の歸する所最高點を以て町議に當選今日に及んでゐる。自作農創設資金貸付調査委員其の他の公職を兼ね、經濟的にも斷然優位を占め、今後益々發展すべき諸條件に恵まれてゐる。

市場所屬仲買人



塚田三助氏 小西克氏 高嶋末次郎氏



佐藤信喜氏 中井英策氏 渡邊惣太郎氏



森熊藏氏 平林仲藏氏 中村長八郎氏

望してゐる。
 尙市場に所屬する冷蔵船取扱及び製造仲買人は、左の十
 二名である。(順序不同)

全	東	朝	之	電	略	電話
高	嶋	末	治	(ア)	又ハ	一九
小	西	克	郎	(三)	又ハ	六九
塚	田	三	之	(コ)	又ハ	七五
中	村	長	八	(キ)	又ハ	一三七
平	林	仲	藏	(ナ)	又ハ	七六
渡	邊	惣	太	(ヒ)	又ハ	三一
中	井	英	策	(ソ)	又ハ	三
佐	藤	信	喜	(ナ)	又ハ	一五四
森	熊	藏	藏	(サ)	又ハ	一五四
北	村	三	郎	(モ)	又ハ	一五四
村	岸	助	治	(キ)	又ハ	一五四
				(ム)	又ハ	一五四



市の市場入札

浦河名産品一覽表

名稱	價格
目拔鯛粕漬	十三入
醉章魚	十七入
鮮の粕漬	十三入
鮮新巻	一尾
刻し昆布	五〇〇匁
のし昆布	一袋十錢
おぼろ昆布	一袋廿錢
えぞ昆布	一袋廿錢
松前錦	一袋廿錢
昆布味	一袋廿錢
親布	一袋廿錢
子漬	一袋廿錢
漬	一袋廿錢
一圓	一袋廿錢
二圓	一袋廿錢
三圓	一袋廿錢

中江水産加工所

名稱	價格	販賣元
日高昆布	特一 把四十錢	日高産業研究所
土産昆布	特二 把三十錢	浦河各食料品店
洋の花	七百五十錢	藤江商店
うかの華	十二十錢	小池水産加工場
いかに	瓶一圓	津村萬盛堂
栗まじゆ	瓶一圓	手取梅月堂
梅月もなか	瓶一圓	伏木田山光堂
カステラ	瓶一圓	同
引茶羊	瓶一圓	蒲田望洋堂
都壽司	瓶一圓	

浦河水産物検査數量 (昭和八年一月より十二月迄)

品名	數量	品名	數量
開開鱈	七〇七	鱈	三、七〇八
乾鱈	一、二二三	目拔	六五五
鱈鱈	七三	魚拔	一六八
鱈鱈	五〇七	鱈	三一九
鱈鱈	一、〇一八	鱈	一、〇〇三
鱈鱈	一、二四九	鱈	一、六六六
鱈鱈	八四三	鱈	五、六四〇
鱈鱈	五五六	鱈	五、五五二
鱈鱈	二二四	鱈	七〇
鱈鱈	三四	鱈	二九五
鱈鱈	三四二	鱈	一一七
鱈鱈	三〇八	鱈	一八四
鱈鱈	二、八四六	鱈	六〇
鱈鱈	四四〇	鱈	一八

浦河商工會々頭 高木徳治氏



四國は讃岐の産、明治二十年代浦河に移住、金物店を開き堅實な足とりを以て今日の大を爲す。
三十六年から昭和五年勇退するまで、引續き町議の職に在り、其の間町會議長代理、町長臨時代理者、保護者會長等幾多の公職に携り、浦河町の發展に寄與した功勞は、永遠に没却すべからざるものである。
就中浦河商業組合長として、浦河港修築促進に奔走し、又浦河産業合資會社代表社員として、魚市場の基礎を確立したるが如き、特筆大書に價する。
現在は浦河商工會々頭、浦河信用組合長として、商店街の中樞機關の牛耳を執つてゐるが、石橋を叩いて渡る式の手堅さは、町民全般の信頼措く能はざる所である。

港の附屬施設

前にも述べた通り、浦河港が竣工したのは昭和五年三月の事で、竣工直後は港内に淺海箇所が存在し、不慮の災害を惹き起すやうな事も稀れにはあつたが、其の後漁業組合の手で大掛な岩礁破砕と浚渫工事を施した結果、今日では二百數十艘の發動機漁船と、三百噸級の汽船を繋船碇泊せしめ

て、猶餘裕綽々たるものがある。

更に昨年来拓殖費の補助を得て、南防波堤の補修工事を施すと共に、第二次浚渫工事を計畫を進めつゝあるから、これが完了を告げた曉は、殆んど間然する所なき良港となる事請合ひである。港に附隨し、而も港の活用と不可分の關係に在る諸施設も、着々進捗完備の域に達しつゝある。いま、その大要を示せば次の通りである。

貯氷庫 従來五六百噸の貯蔵力を有する貯氷庫のあつたところへ、昭和五年以來漁業組合直營の氷倉二棟（一棟五十坪）を建設、本年更にもう一棟を増設する計畫で、優に千五百噸程度の貯氷設備

日高貨物自動車株式會社社長 田中清三氏



四十二歳の今日に至るまで浦河に生れ浦河に育ち浦河に活躍しつゝある真正銘譽偽りの無い浦河兒である。浦河運輸は先代以來の回漕業であり、陸上交通の發展に對應すべく日高貨物を主宰する等浦河に於ける運輸事業の中軸を爲す人物でもある。帝國水難救濟會浦河救護所長として港浦河の護りに任じ、浦河町常設委員にも擧げられてゐる。氏の町議出馬は其の摩既でに久しく、今夏六月の改選期には否應なく實現するものと期待される。濃厚にして寡黙、些の紛飾も無い氏の如きは典型的浦河人の活標本と評し得やう。

を有する事となる。

氷は向別川の清水を以てせる天然氷で、冬期間の暖寒に依り年々氷質に幾分の相違はあるが、魚類の冷蔵用としては申分のないもので、價格も他の地方に比し寧ろ廉價に供給してゐる。

燃料 發動機漁船の米の飯とも云ふべき燃料用重油は、従來漁業用燃料として免税の手續きを怠つてゐた爲め、昨秋の如き千葉縣突棒鮪漁同盟の諸君から非常な非難を蒙つたが、本年は免税手續きも了し、奥田商店が代理店であるライジングサンでは昨秋早速日本漁網會社の手で船入潤理立地に重油タンクを建設、高津商店扱ひの日本石油でも本年はタンク船を配置し、如何なる大量の需用に對しても、斷じて商喰はぬ準備を整へて居り、ドラム罐詰は従前通り河野商店で取扱つてゐる。

斯くして、三者歩調を合せ今年からは燃料問題で浦河港の聲價を非議されるが如きことのないやう満全を期し



の 鮭

てゐる。

給水設備 船舶用の水が充分でない點も、これまでは浦河港の致命的缺陷とされてゐたが、本年は従來の簡易上水道を擴大延長し、港内漁業組合事務所側に給水栓を新設したから、もう大丈夫である。

水産倉庫 一般民營倉庫の外に、今春日高水産會經營の水産倉庫が、北部埋立地の浦河停車場敷地近くに建築され、廣く漁業者に對し便宜を圖ることになつてゐる。



漁 大

漁網干場 網干場が手頃な箇所存するや否やは、繰業能率の上に至大な關係を持つ大切な要件の一つであるが、浦河港は生憎干場に充つべき空地を附近に持つてゐない。其處で已むを得ず貨物自動車會社と特殊契約を結んで、市街西端の海濱へ自動車で運び、此處で乾燥する事にした。この濱地であれば一舉に八千反や一萬反の網を干すことは、易々たる茶飯事である。

造船所 川崎船から發動機漁船に轉向して未だ年月の短い浦河は、正直なところ御安心下さい…

と言ひ切れる造船所、船揚場を持つてゐない。然し漁業組合附属市場、既設埋立地との間の所謂港内中央部埋立計畫の完成を俟つて、この一帯を船揚場、造船所及び冷蔵庫、罐詰工場等の敷地に充當する方針を樹て、極力その實現を急いでゐる。

燈臺 潮見丘上の浦河燈臺は、明治二十四年の設立に係り第六等不動白光燈で、南防波堤の突端には明滅紅色燈が一基設置されてゐる。北防波堤突端にもう一基を新設し、更に潮見丘上高く晝間



別川鮭工人場化

標識塔を建てねば……との議が進められてゐる。

測候所 浦河測候所は昭和二年に設置され、燈臺と並行して潮見ヶ丘に建つ同測候所の存在は、地方漁業者に限の心強さを與へてゐる。

船宿 船宿制度の慣習を持たぬ浦河は、昨年千葉縣の鮭漁船を迎へ、この



高島宿船業作氏

船宿で大いに面喰つた。然し高島商店が率先居室を開放して希望に應じたので、一部の人々には或る程度の満足と與へることが出来た。本年からは高島商店を中心に船宿組合を組織し、舉町的態度を以て船宿問題の解決に當り、居心地のよい休息所を提供し得る豫定である

紹介輪旋

日用雜貨その他必需品の供給機關に就ては項を新にして

詳述するが、其の間遺憾なきを期する爲め、浦河漁業組合内に「相談部」を設け、物資の供給關



が非常に熱心な敬神家で、伊勢講、敬神講等に盡した功績は著大なものがある。

浦河漁業組合 會計主任 中江勝藏氏

京都府下間人町の産、明治二十五年浦河町に來住、伯父に當る先代奥田惣兵衛氏を援けて創業未だ日淺き奥田商店の業務一切を擔任し、銳意經營に當ること前後二十三年、奥田家の今日在る一半の功は中江氏に在ると謂はれてゐる。

大正三年奥田商店を辭して後は獨立して質屋を開業、四圍の懇望もだし難く、昭和三年一月入つて漁業組合の會計主任となり今日に及んでゐるが、經理出納の責任者の中江氏の在ることは、漁業組合の財政的信用を倍加せしめてゐる觀がある。剛直、明敏、商機に通じ、斷然地元金融界を牛耳つてゐる

浦河町青年團 第二分團長 淺 香 三 郎 氏



明治三十三年生れの浦河つ見である。町役場書記、日高畜産組合書記等を勤めたこともあるが、先代からの家業である薬店の方が多忙になつてか、は勤め人生活から足を洗ひ、弟君と相協力して涉香薬店本支店の経営に専念する傍ら、浦河青年團第二分團長及び日高皇道青年會理事として、郷土青年の指導勝披に精勵してゐる。

浦河も今や人物轉換期に當面してゐる。即ち老人組が後退して壯年組がその後を繼ぐべき交替の機が熟しつゝあるのであるが、純理を無視した妥協を嫌ひ、飽くまでも手堅い性格と實行力を持つ氏の如き、その最もよき後繼者の一人であつて、今後浦河町の氏に期待する所は尠少なからざるものがある。

係は勿論地元の不馴れな外來船に、些かたりとも不便不快を感じしめざるやう、一切の相談に應じて進んで紹介斡旋の勞を、惜しまぬ方針である。

國鐵開通 最後に繰返して述べて置きたいのは、國有鐵道日高線の浦河開通が明春に迫つてゐることである。浦河停車場は北部埋立地即ち船入洲に殆んど接近し、恰も臨港鐵道の如き機能を發揮するに至るであらうと期待される。

商店街

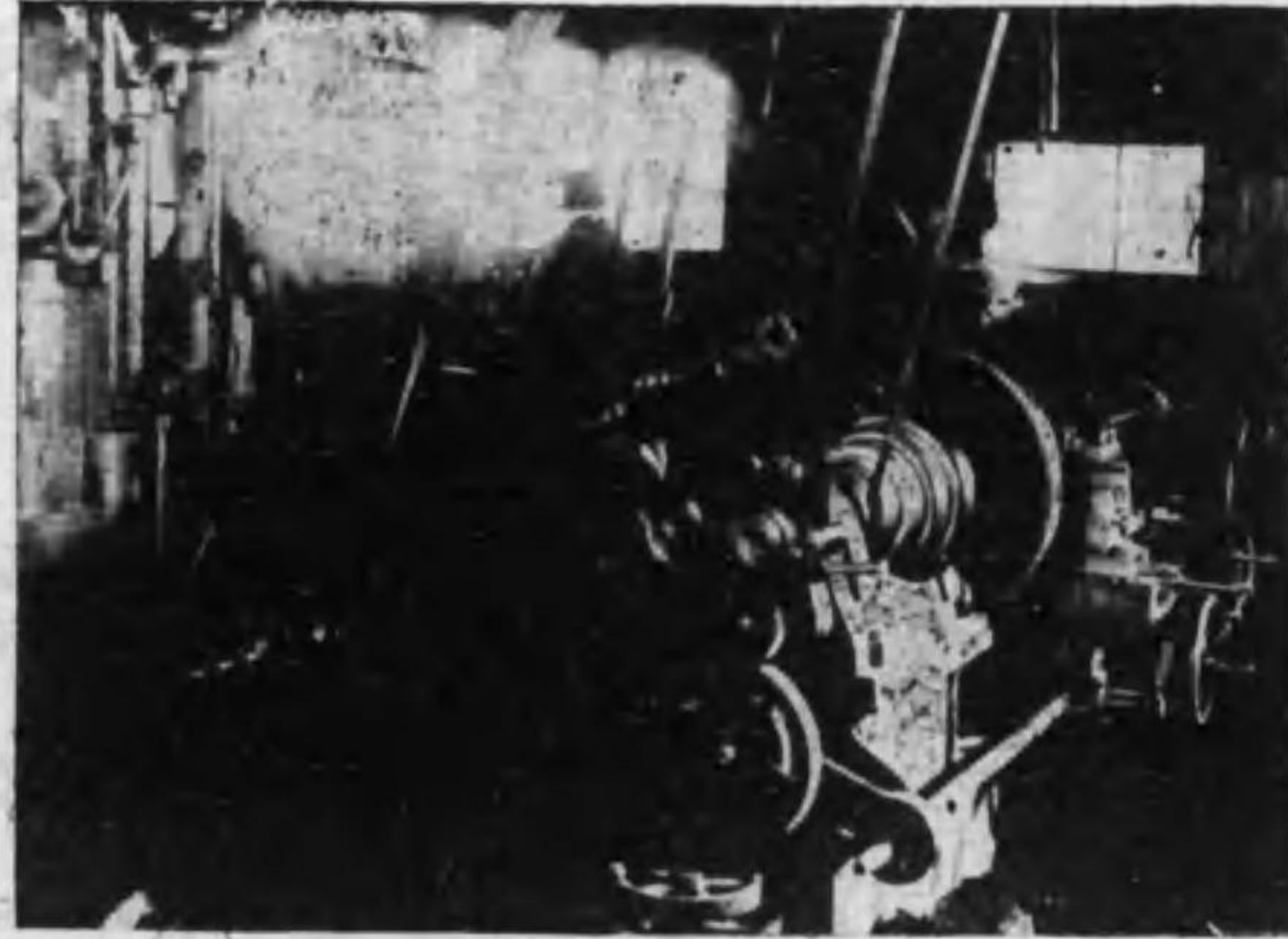
希ひ憧れた宿願が達成成就した瞬間、人は却て底知れぬ空虚を感じるものだ。浦河も、いや浦河の町民も、港の竣工直後一時斯うした虚脱状態に陥つたことは事實である。

然し今日では多年港の完成に心血を注いだ本然の目的に覺醒し、「浦河の繁榮は港から——」を合言葉に官民協力、殊に商店街は一致結束して港の兵站都たる使命を完うすべく、目覚ましい活動を續けてゐる。



クンダ油重店商田奥

既に説明した通りであるが、奥田、高津の兩商店は城地、濱谷の諸店と共に油の外米穀雜貨其の他の日用品を販賣して居り、河野商店は小川、高木、池田、奥泉商店等と共に漁具類一切を販賣。奥服太物類の代表的店舗には田口商店があり、洋品店としては濱田商店



澤 鐵 工 場

一商品目(電話四八番) 小川隆吉 ④高木商店 金物類一切、漁具、度量衡(電話一四番) 高木徳治 羽池田商店 發動機用部分品、機械工具、ベイント類、其他金物類一切(電話二二三番) 池田小太郎 羽泉商店 漁業用線糸、釣糸、合羽類、漁業用ランプ、其他 泉隆平 ⑤城地商店 米穀雜貨、陶磁器、日用食料品(電話一三二番) 城地清太郎 ⑥網谷商店 藥種商、小間物化粧品、雜誌、學用品類、藥局部あり(電話二二三番) 網谷安治 合濱田洋品店 新古洋服附屬品類一切、家具、建具、靴類(電話三五番) 濱田定次郎 ⑦田口吳服店 吳服、太物、洋品類、家具部あり(電話五四番) 田口忠之助 ⑧濱谷商店 和洋菓子、米穀類卸兼小賣(電話一七番) 濱谷官藏 團鼻月旅館 客室完備、卓上電話あり、浴室の設備道南第一(電話三八番) 平村岸酒釀造店 蝦夷正宗釀造販賣元(電話三番) 村岸徳次郎 【貴金屬時計番書器店】 三上三榮堂、酒井時計店、高瀬時計店、杵臼産業組合野菜卸賣市場、日高産業研究所 花折昆布、まつも、海産加工土産品(電話一〇八番) 小池

を推す。
旅館は設備サービスの行届いてゐる點で昇月旅館が斷然群を抜きこれに次ぐものに京谷、秋田屋、越野等がある。清酒の醸造は村岸酒造店の獨占するところ、此處で醸造される蝦夷正宗、黒松は着々移入酒を駆逐し、その醸造高は年六百石に達してゐる。藥局、藥品洋物、文房具、書籍店たる網谷商店は町の中央部に位置し、買ひ心地のよい店として好評噴々たるものがある。

参考までに町内店舗を營業別に示せば大要次の如くである。
④奥田商店 米穀雜貨、日用品、太物類、漁業用燃料類一切(電話四番) 奥田惣兵衛 ③高津商店商品部 米穀雜貨、陶磁器、日用品、漁業用燃料一切(電話六四番) 高津平吉 ③高津商店氷部 冷蔵及雜用水販賣(電話一三番) 高津彌三吉 浦河漁業組合貯氷部 漁業冷蔵用水分譲(電話九番) 嘉河野商店 漁業用岩糸、線糸、漁網類、發動機部分品、機械工具、カーバイト、ベイント、石油、釣針類(電話一四九番) 石田榮太郎 羽小川商店 河野商店と同



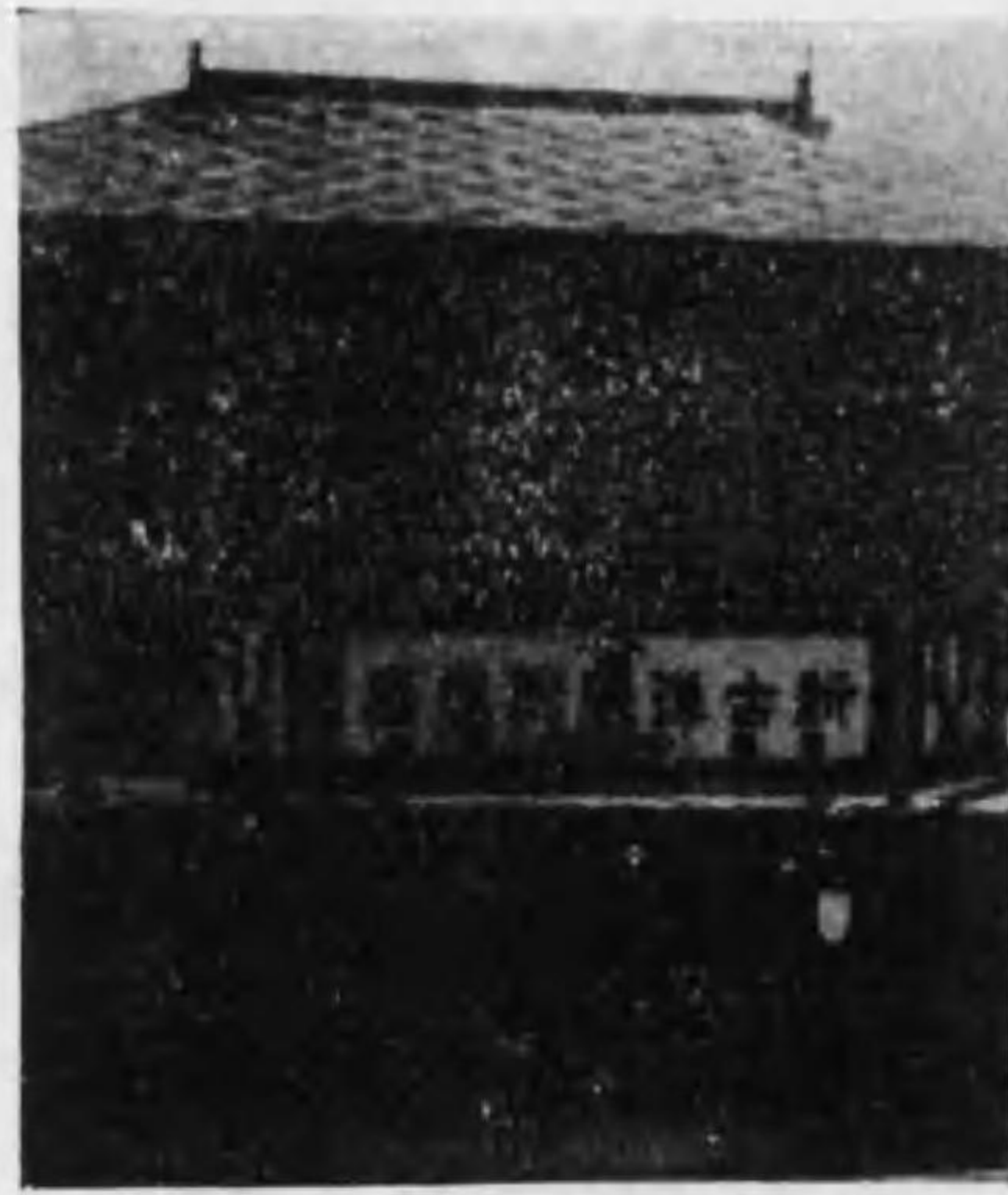
貯 氷 庫

水産加工所 雲丹、鹽辛、佃煮 江藤水産加工研究所 花かつを、削章魚、節類 中江水産研究所
 削昆布、刻昆布、昆布茶、削蛸 【木炭販賣店】 濱田龜藏、坂本勝治、森岡サダ、小林幸吉、山澤
 ヤエ、池田米吉、菅ナカ、高島忠作、零キヨ、濱田定次郎、濱浦平太郎、手取盛吉、駒孝一、中井
 ナカ、奥山新藏、矢野悦次郎、濱谷銀造、京谷量太郎、坂本鐵藏、松田美實 【荒物雜貨米穀食料品
 店】 西口商店(二番) 矢野商店(四五番) 三好商店(五一番) 下川原商店(七番) 甲谷商店(二〇番) 品田商
 店(五九番) 天野商店(六七番) 三上商店浦河消費組合 【酒類罐詰果實食料品店】 中江商店(電話一
 四七番) ミナトヤ食料品店(電話二二番) 大衆商會(電話八番) 大谷商店(電話一四一) 高木果
 實店、早坂商店、浦河消費組合 【吳服太物店】 市
 川百貨店(電話一五二番) 池添吳服店(電話四七番)
 令喜田吳服店(電話一二三番) 濱谷洋品部(電話一
 二八番) 園商店(電話一四五番) 井上商店、富久屋
 洋裝店、梶田吳服店(電話一番) 鹿野商店 【旅館】 京
 谷旅館(電話三〇番) 昇月旅館に次ぎ客室完備す 秋
 田屋旅館(電話二六番) 越野屋旅館(電話五八番) 藤田
 旅館(電話一一九番) 小島旅館 【菓子店】 山崎菓子店
 (電話六六番) 手取梅月堂(電話四二番) 伏木田菓子舖
 津村萬盛堂(電話四〇番) 富士屋菓子舖(電話一三八

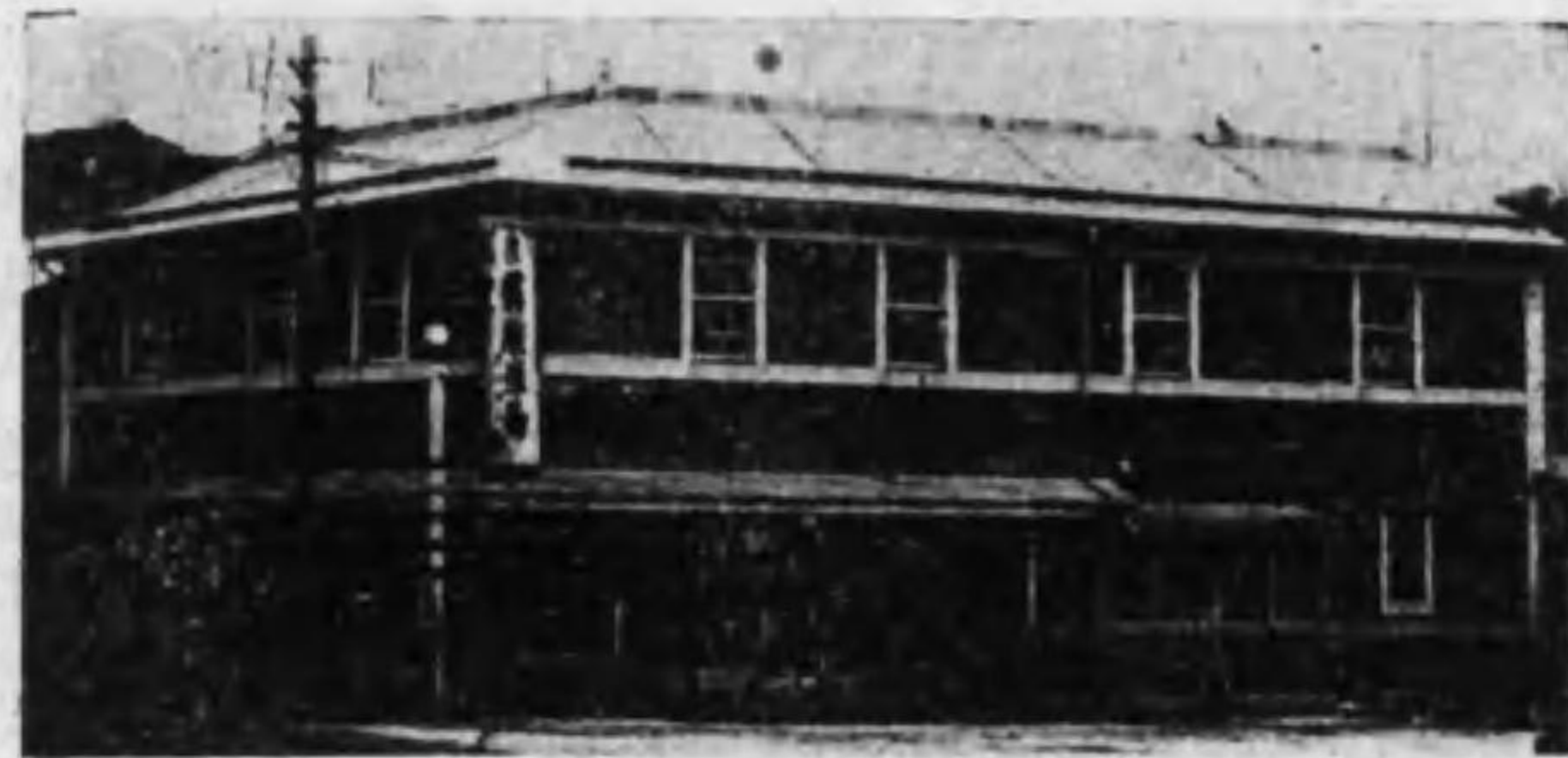


河野漁具店

番) 坂本菓子店、蛭田製粉製餅所、碁石餅煎屋、森川大福餅屋(外に大關餅、みなと餅、くりやき、み
 なとやき、あつぷる焼、はまぐり焼、等甘黨向のものが澤山ある) 【藥種小間物化粧品文具店】 淺
 香本店(電話七〇番) 淺香支店(電話一二六番) 中村一心堂(電話一五番) 朝倉藥局、清水月華堂、鹿川
 商店 【書籍文具專門店】 古市カツサヤ商店(電話三三番) 【活版所】 大針活版所(電話二二番)
 天野活版印刷部 【陶磁器塗物小間物店】 石川商店、牧野商店(電話一三三番) 島田商店 【豆腐屋】
 板倉豆腐屋、小林豆腐屋、渡邊豆腐屋、文化豆腐屋、渡邊豆腐屋、鈴木コンニャク屋、平田豆腐屋



【肉店】 瀬尾肉店(電話六三番) 高木肉店(電話
 一二二番) 成田肉店(電話二二九番) 宮本肉店
 今笹尾醬油醸造所(電話一一番) 三浦味噌醬油醸
 造所(電話一二七番) 沼精穀所 【鐵工所】 澤鐵
 工所、中山鐵工所、畑中鐵工所 【鑄工所】 大
 谷鑄工所 【鋸冶工】 池田鍛冶工場(電話一二
 五番) 【船大工】 櫻田造船所(電話一三〇番) 村
 山造船所、田中造船所、廣瀬造船所(後柄村)
 【寫眞館】 菅沼寫眞館、山本寫眞館、清澤寫眞
 館、酒井寫眞館、日高寫眞館(電話六二番)
 【裁縫店】 小村洋服店、マルモリ洋服店、安田



洋服店、石突洋服店、工藤洋服店、武田洋服店、松山毛糸編物製作所【履物並靴店】松田履物店（電話一三五番）紅屋履物店、大谷履物店、中宿靴工所、工藤靴工所、小林馬具靴工所（電話六三番）【髪結店】森川理髪店、大月理髪店、越野理髪店、關理髪店、棚橋理髪店、佐藤理髪店、藤谷理髪店、木村理髪店、内田髪結店、坂本髪結店、野田髪結店、蒲田髪結店【湯屋】みどり湯、恵比須湯、常盤湯【疊屋】福井疊製作所、井上疊製作所【看板と裝飾】平凡社、大洋堂看板店【造花店】博善社、久保田造花店（電話三四番）【土木建築請負業】谷万吉山本政吉【其他】【柘屋】小林茂、駒小三郎、廣澤繁藏【建築大工業】清水作太郎、下神田西太郎、平野愛藏、平野清作、加藤菊五郎、藤原常三郎、三島源藏、大關家具製作所、佐野家具指物製作所、柴田大工【蹄鐵工所】坂本蹄鐵工所、角田同上、高田同上、黒神同上、佐藤同上

娯樂設備

最も一般向きな娯樂機關として大衆館、大黒座の二館がある。大衆館は松竹、新興キネマの製作品を上映、大黒座は日活系に属してゐる。兩者共常設館ではないが、漁期中の賑ふ際は殆んど毎夜ぶつ通しの興業で、映畫の外に地方民謡・レビュー、浪花節等の出し物をも適當に配合し、その興業政策は手に入つたものである。

玉突場は濱町通りのタイガーが獨占、今流行の麻雀俱樂部としては都便局附近に一莊俱樂部、浦河麻雀俱樂部の二ヶ所があり、地元の麻雀熱は容易に衰へる氣配も見受けられない。野外運動場としては、潮見丘上に同名のグラウンドがあつて、何人にも自由に開放されてゐる。然し釋迦か基督の申し子ではあるまいし、命を的に洋上遠く活躍する海國男兒を捉へ、戶外運動場を以て娯樂場でござい……は些か血の巡りが悪過ぎる。



濱谷製菓店



カ ー ツマロク 家松若
奴 一 子 英 松 藤



座 銀 座 銀
子 み す 子 光・み と ひ



家松若 享月明 家松若
若 代 千 子 花 松 幾



洋 太 モリエ 本 藤
子 シ ヨ る ほ か 蝶 小



屋 妻 吾 んやち坊 んやち坊
子 君 子 綾 子 花



ミケア 本 藤 ツマロク
子 士 富 奴 町 弓 眞

と言つてこの方ばかりは餘りアケスケ言ひ放つては、あちらこちらに差し觸りを生ぜぬとも限らない。依つて甚だ通り一べんではあるが、次に項を改め浦河花柳界の輪廓を説明する。

冬枯れ季節の數字であるから春、夏、秋の交に較べると美人その他の數も減少してゐるが、盛漁期ともならば恐らくこれが倍加されるやうな結果とならう。具體的な記述は遺憾乍ら省略せざるを得ないが、如何なる要求の方々に對しても、決して失望不滿を與へぬであらう事を斷つて置く。

(追分節)

前唄 沖に見ゆるは片帆か眞帆か ヤンサノエー

浪にゆられて居るわいな

ならば鷗にふみことづけて ネー

入れてやりたい浦河へ

本調 鮎大漁に港はよいし

漁り船よる賑かさ



村岸酒造店



アケミ

節 送唄 磯に黄金の波打ち寄せる ネー
沖で鷗も嬉し啼き

子 浦河の花柳街

浦河の花柳界が或る意味で盛賑を極めたのは、何と言つても海月と若松家が拮抗して互に譲らな

浦河漁業組合書記長 小 關 一 雄 氏



昨秋日高地方を視察した北海タイムス社の取締役支配人山口喜一氏は、歸札後「浦河に小關と云ふ快男兒がゐる、太平洋の制海權を獨りで掌握してゐる様な事を云つてゐた」と語つてゐたが、蓋し書記長小關の滿々たる覇氣を評し得て妙と云ふ可きである。

生れは北海道爾志郡乙部村であるが兩親は山形の出で、武士道華かなりし頃は相當の家柄であつたと傳へられてゐる。愛想笑ひ一つしない頗る取つ付きの悪い男ではあるが、一度び肚を割つて交際へば又と無く頼母しい男でもある。

當年取つて三十八歳の働き盛り、十九歳で瀬棚村役場の兵事主任を勤めた所を見ると相當なモノであつたらしく、其の後雜穀仲買人、土木請負業等波瀾曲折に富む青年時代を過し、大正十四年組合入りをする直前は浦河町役場の主席書記であつた。

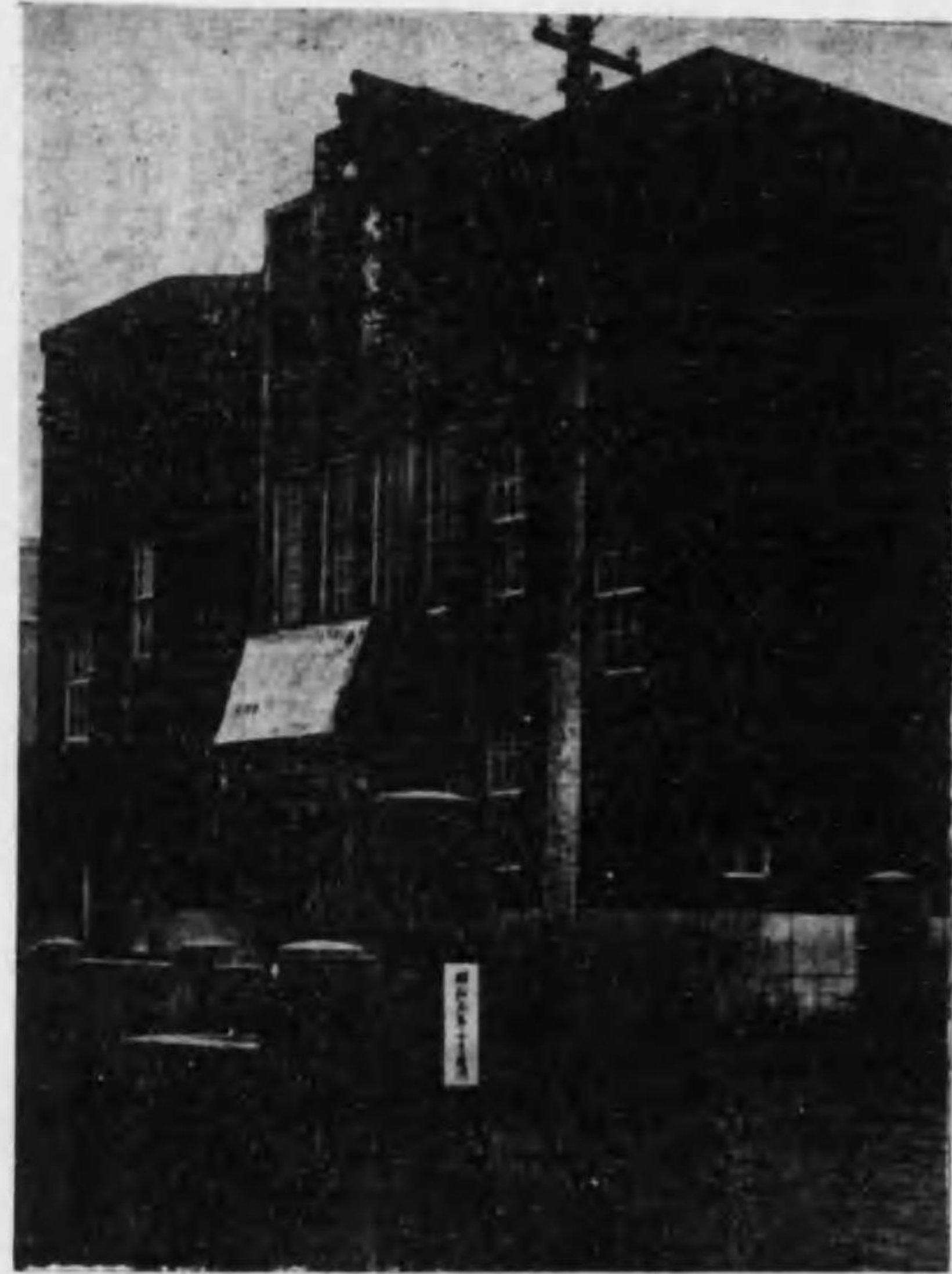
浦河町助役 鈴木 廣氏



福島縣岩瀨郡白方村の産で明治十七年の生れ、長く小學校に教鞭を執り、大正十二年秋氏が町長時代の北見國野付牛町役場に入つて書記となり、昭和六年同役場の庶務課長から上生田原村長に榮轉、昨八年六月秋氏の知己に感じて同村長を辭し、再び秋氏の許に助役として迎へられた人である。寡言敦厚如何にも福島縣人らしい風格の持ち主ではあるが、内に烈々たる熱血を藏し、一度び友を得て相語らう時は談論風發、殆んど常時と人を異にするが如き感を懐かしむるものがある。事務に明く、自治體の本義を解して役人まがひの臭味無く、謙虛な心構へを以て町民の公僕たるに遺憾なきを期してゐる。

かつた數年前の事である。

其の後海月が縮小されて現在の藤本に形を變へ、若松家の獨り舞臺になつてからは、營業者自身も張合ひ抜けした事であらうが、遊ぶ方でも些か間伸びした感を禁じ得ない。然しそれに代つて時代の花形職業の一つとも云ふべきカフェエが猛烈な勢ひを以て勃興して來た。そして料亭の人氣は稍々此の方にむしり取られた觀が無いでもない。いま浦河には港の荷揚場に近い濱町通りを中心に、ミナト、クロマツ、東家、若松、キング、太



劇場大業館

洋末廣、坊ちやん、アケミ、銀座、エリモ、明月、その他十數軒のカフェエが軒を並べ、次々に新手法の營業方法を工夫考案して、華客の吸引策に各々智慧の有つたけを絞つてゐる。

ではあるが、カフェエの經營者が總じて此道の素人であるのに對し、料亭の主人は何れも千軍萬馬の古武士揃ひ、従つてカフェエ街の繁榮をアツケラボンと袖手傍觀する者では無く若松家はカフェエト若松を兼營、一カも亦カフェエエリモの經營を兼ねると云ふ有様で、それ／＼カフェエ街の繁榮に均霑してゐるばかりか、進んでその中心勢力

たらんとする形勢を示してゐる。

その中に在つて依然料亭の一本槍で押し進んでゐるのは藤本と一直、一福家の三軒であるが、藤本は昨年来の好景氣に鑑み、秘かに海月の復活再興の計畫を進めて居り、室蘭市に在つて藝妓置屋海月を営み、目茶苦茶に受けてゐる浦河海月の元經營者及川氏が之れに賛成しなへすれば、宏壯な建物をはじめ建具什器一切その儘になつてゐる海月の再營業は、手間暇を要する相談ではあるまい。兎に角此の夏は港を埋むる發動機漁船の爆音と相交錯するレコードの旋律、三弦の響きを以て、濱町通りは再び狂歌亂舞の歡樂境と化することであらう。現在の浦河には料理店十二軒、カフェー、飲食店二十六軒で此處に抱へられてゐる職業婦人の數は藝妓十一名、女給五十一名、酌婦十三名で、此の外常盤町の奥には貸座敷業として梅花樓、田中



小高日

樓の二軒があり、抱へ娼妓の數は十名である。

花柳界に就て少しく具體的説明を試みるならば大體次のやうなことになる。料理店としては前にも述べた如く、現在のところ若松家、藤本、一カ一直、一福屋其の他十一軒で、その代表的なものは若松家である。

主人の松井源太郎氏は眞龍軒と號し旅稼ぎの一賣卜者として浦河に來り、居を定めて以來未だ餘り長い歲月は經つてゐないが、自らの運命を卜ふに足る活斷の持ち主であつたとみえ、最初は極くさゝやかな營業に過ぎなかつたものが、擴張に次々に擴張を以てし、何時の間にか日高第一の料亭をでつちあげてしまつた。

百二十名までの宴會を引受けるに足る大廣間を有し、藝妓、幾松、千代若、秀松、藤松、光若、市松、勝奴、メ松、マリ子等の抱へ妓は、美貌と藝とサーピスとの三拍子揃つた何れ劣らぬ腕つこ



り 爾 唄

日高小唄

All. mos. Op. 108
 (4拍子)
 3 3 1 7 | 6 6 7 1 7 6 3 | 0 2 3 4 6 6 4 3 | 1 | 2 2 1 0 6 0 6 |

0 1 3 1 3 4 6 | 7 1 7 6 7 | 7 0 6 4 2 | 3 3 1 0 4 6 4 3 |

3 4 6 4 6 7 | 0 7 3 1 7 6 1 | 7 0 2 2 2 | 2 3 4 3 4 6 6 4 |

2 2 3 0 1 3 1 4 6 7 7 | 7 1 6 1 3 0 3 4 3 | 7 1 7 6 - 4 |

- 日高小唄
- 一、花は線亂 五彩の雨に
 庶野は浮世を 外にして
 願かけましよ 襟袂の神に
 春のあしたの 夢ごこち
 水脈は白銀 親潮はのと
 ネオンサインか 漁火か
 港浦河 出船の気笛に
 - 二、夏のゆふべの 戀ごこち
 沙流の流れか 穂波が光る
 馬の日高よ 意気なサラ
 逢瀬急いで 拍車をあてよ
 秋のまひるの 浮ごこち
 枯葉舞に 夜鳥がとまる
 送りませうか 静内標似
 ヘットライトに ちらちら小雲
 冬よふけの 酔ごこち
 - 三、
 - 四、

き、ともすれば眼先きが變つて經濟的なカフェーへ足を向けたがる客筋をがちり擱んで放さない藤本、一方は大體に於て小揚り専門の營業方針を以て進み、小蝶、町奴の姉妹が、藤本の人氣者であるのに對し、一方では一奴が斷然光つてゐる。

更に目をカフェー街に轉ずるならば、

クロマツ 濱町大通りに面し若松家と向ひ合して對陣、伊佐夫、美佐子、弘子、眞弓、英子、秀子その他札幌、小樽、函館等でそれぞれ修練を積んだ女給を揃へてゐる。

新築後間の無いホールの氣分はよし、それにお客を誰れ彼れと差別なく、家庭的な親し味を以

浦河漁業組合長 舛 谷 樹 藏 氏

明治十四年兵庫縣城崎郡小島村に生る。同十九年兩親に伴はれ渡道の途中病ひの爲め不幸嚴父を失ひ、骨箱を抱いて小さいな帆船から浦河の港に降り立つたといふ悲しい思ひ出を持つてゐる。



義勇消防浦河親友會、浦河昆布會の會長たることは既に久しく、この外浦河臨時漁港調査委員等々幾多の公職や名譽職に携つてゐる。

て遊ばせる所に、この店の特徴がある。

若松 若松家は別段取り立て、之れと云ふ特色の無いところが、如何にも松井氏の経営してゐる店らしい。不思議に女給の移動が無く、各職業階級を取り混ぜた定連で、何時も満員の盛況。客足を落さぬ秘訣がどこにあるのか一寸見當が付き兼ねる。

女給は、一美、バリ子、しげ子、光子、潤子、良子、春子、笑子、しみ子と言つた顔ぶれ、太洋、小ちんまりした喫茶店風の店構へで、女給も僅か歌子、洋子、よし子の三人が居るに過ぎないが、ボックスの空いてゐる事など滅多にない。

飲んで騒ぐと云ふよりも、飲み疲れた客の休息所と言つた形の店である。

キング カフェー街濱町を離れ、大通りに位置してゐるため、餘り目立たないところに客を引き付けるこの店の魅力があるやうだ。

経営者の好みで、女給は凡て大阪、京都等關西の出を揃へてゐる。荒つぽい港街の言葉聞き馴れた耳に響く軽い調子の關西辯も亦一風情である。女給はハル子、良子、愛子、其の他……

坊ちゃん 遂先頃まで、お役所勤めをしてゐた西野氏が、心機一轉退職すると同時に開業した店である。

何處でもさうであるやうに、新店坊ちゃんも浦河中のカフェエ1の上玉女給が、期せずして此處に集中した観がある。



大黒座

敏子、順子、あや子、千代子、惠美子、美春、勝子、まり子等モダンでエロチックなその女給陣は、浦河カフェー界の異色とするに足る。

アケミ 経営者が板前の出、それにマダムが開業するまで女給として第一線に立つてゐた腕達者経営にソツのあらう筈はない。

なみ子、ふじ子、光子、みさ子、洋子、節子、かの子など、何れも函館の出身、どつちかと言へば客筋は土地の知識階級が多く、アケミはカフェー街の代表的存在として浦河の一名物になつてゐる。

銀座 経営者の濱谷徳造氏は、浦河の老舗濱谷雑貨店からの轉向者、未だ三十そこ／＼の若い身空ではあるが、カフェー経営者としては早くも試験済み、隅に置けぬ利け者だ。此處の女給に

町會議員 田口忠之助氏



秋田は角館町の産、頭髪霜を戴き、額から上は如何にも老人らしいが、呉服屋さんには不向きな程ケイ／＼たる眼光は、未だ古存木に非らざる所以を實證してゐる。

東京に出て事業を経営したり、十勝の札内で柏皮剝取事業を経営したり、相當波瀾に富んだ幾變遷を経て、大正十二年再度浦河に來住してからは呉服太物洋物商を開店、忽ちにして日高第一の現店舗を作り上げてしまつた邊り商機商略に敏な氏の天資が窺はれる。

斯う云へば通り一片な所謂ヤリ手に過ぎぬやうに聞えるかも知れぬが、氏は又誠意眞情の人として町民から絶對の信任を寄せられ、隠れたる善行美德も少くない。

町議の外浦河商工會議員、衛生組合長、火災豫防組合長、浦河信用組合監事、方面委員等を兼ね、名實共に浦河町の中堅人物である。

浦河町長 荻 丹 榮 氏



明治二十年福島縣双葉郡上岡村に生る。大正八年野付牛警察署長時代懇望されて同町の助役に就任、更に同町長に推薦され昭和六年春までその職に在った。
その風采より察し、若き日の氏は精悍無比の闘士であり、機略縦横の謀士でもあつたらうと想像されるが、治難の町野付牛に職を奉じ、助役町長たること前後十二年、具さに人情の機微を察し、曲折多岐な人生の表裏に通じ、大いに修むる所のあつた今日の氏は圓熟大成し、自治體の責任者として稀れに見る適材である。
現職に就てからは、焦らず急がず眞に町百年後の福祉を完からしむ可く、緩急本末を正しつゝ諸施設に渾身の心血を注いでゐるが、殊に青年の指導啓蒙に意を用ひ、青年日高の實現を期してゐる。

はどうした巡り合せか、客を客と思はぬ傳法肌の女が多い。

ますみ、京子、澄子、麗子、光子、ひとみ、俊子、はじめ等々、愉快に飲んで大いに騒ぐことにかけては敢て人後に落ちぬ猛者揃ひ、客を無視したやうな超サービスの独自のサービス振りが又受けてゐるのだから面白い。

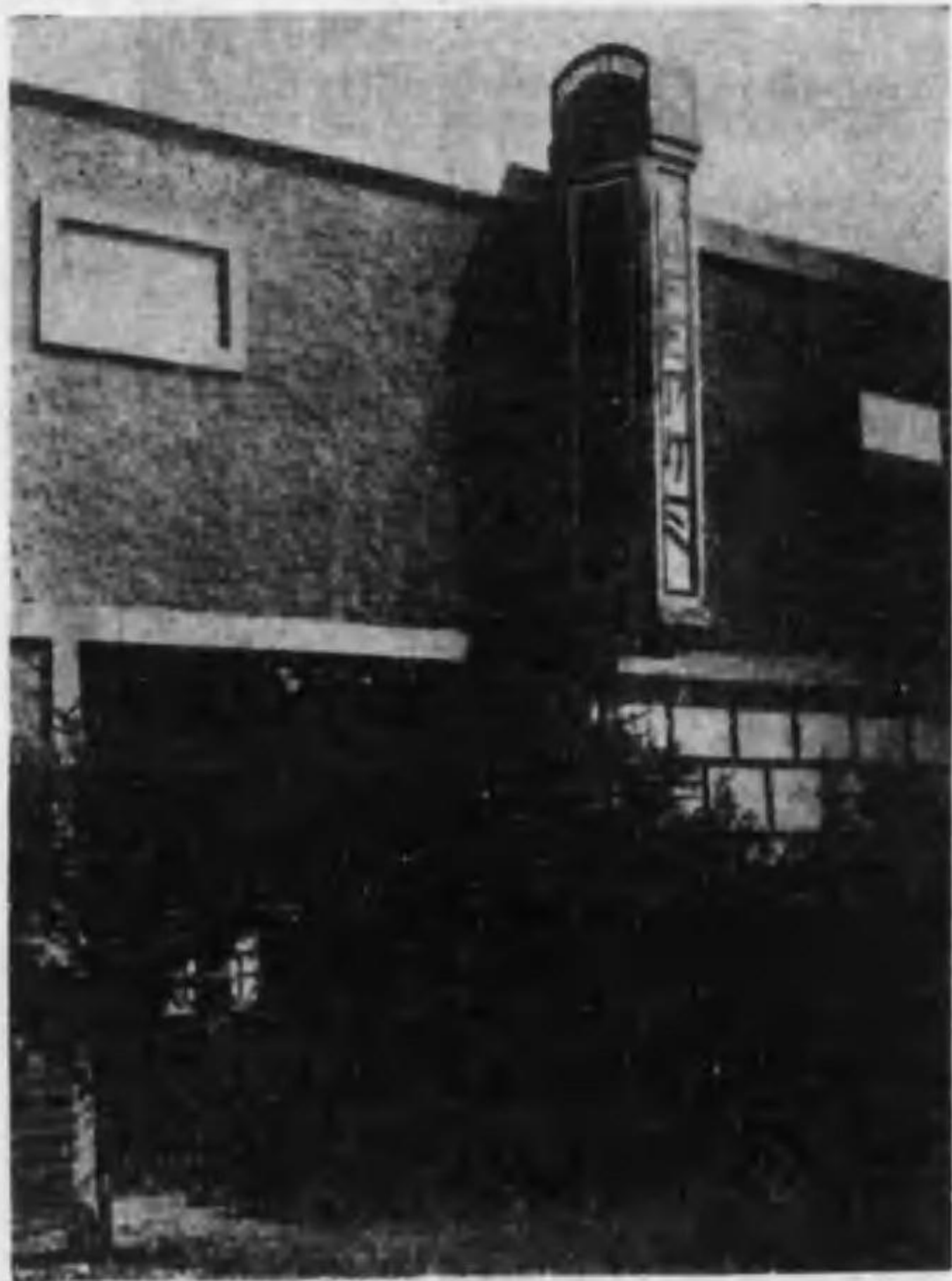
エリモ 濱町の一番はしつこに在るんだからエリモの店名が愈々生きて来る。

一力の經營に係り、此處の女將は往年「海月」で一八と名乗り鳴らした事のある利け者である。ホール内の構造が羊の胃囊の如く複雑で、特殊の落ち付きがあり、かほる、みどり、やぶ子、洋子、こま子、なゝ子等のサービスと相俟つて、照り降りのない繁昌振りを見せてゐる。

交通運輸其他

鐵道の延長に反比例して其の區域は漸次短縮されつゝあるが、過去十數ヶ年に亘る日高は自動車運を以て唯一の交通機關とし、現在も浦河以東鐵道の恩恵に浴せざる地方は自動車の便に依り、運輸方面は汽船と貨物自動車の競争時代に入らうとしてゐる。而して其の代表的な關係會社は次の五社である。

日高自動車株式會社 資本金十五萬圓、昭和六年十二月從來の日高合名會社と個人經營赤線自動車を併合創立されたもので、重役は社長長谷萬吉、専務取締役出口慶次郎、取締役奥田惣兵衛、出口千代七、西川岩二郎、監査役葛西喜代太郎、東朝之の諸氏、三石庶野間四二哩九及び覺舞歌笛間五哩三を營業路線とし往復回数三石浦河間八、浦河幌泉間五、幌泉小越庶野間二、覺舞歌笛間三で、使用車輛は大型バス(二五人乗り)七臺、小型八臺何れも



ミケアーエフカ

日高毎日新聞社長 竹嶋由太郎氏



富山縣西礪波郡立野村に生れた所謂越中衆であるが、北海道に於て越中衆といふ語は、堅實なる人物といふ言葉と同義に解されてゐる。明治四十年小樽市に來つて小樽新聞社に入社、その後帯廣市の十勝毎日新聞社に轉じ、昭和七年十二月から現在の日高毎日新聞を創刊經營してゐるが、由來日高は新聞事業の生長に幾多の障害を有する土地柄であるにも拘らず、氏の晝夜を分たぬ奮闘は創業以來昔年ならずして早くも牢固たる社礎を基き大いにその前途を囑望されてゐる。

本年三十六年の働き盛り、奮闘に次ぐ奮闘を以て一切を克服し、綽々たる餘裕を示しつゝ、社業の發展向上に餘念なき氏の將來は刮目に價する。

シボレーの優秀車で一日の乗車人員五百名を上下し、同社は年一割五分の好配當を續けてゐる。

日高貨物自動車株式會社 昭和三年三月創立、資本金二萬五千圓、社長田中清三、取締役奥田惣兵衛、高津彌三吉、西濱小三郎、土居梅二郎、甲正雄、監査役網谷安治、田尻菊雄の諸氏を重役とし、二噸車三臺、一噸半四臺計七臺のトラックを運轉す。



日高運送社 西濱小三郎氏

日高運送社 昭和八年四月創立、資本金五萬圓、重役は社長奥田惣兵衛、取締役高木徳治、澤吉夫、原口春巳、齋藤篤、田代喜八、土居梅二郎、栗林徳一、監査役高津彌三吉、田尻菊雄支配人西濱小三郎の諸氏、海陸運送保險倉庫、金融委託賣買を營業種目とす。

浦河運送聯合會社 資本金五萬圓、代表社員田中清三氏、函館市の金森商船株式會社、三好商會、千島汽船株式會社の浦河就航汽船を扱ひ青森合同運送社、丸共運送社とも聯絡を有す、尙取扱ひ船船及び毎月の航海回数(金森)東山丸(三二八噸)二回、東郷丸(三〇三噸)二回、東海丸(三〇二噸)

噸)二回、東春丸(二七三噸)二回、東龍丸(一九七噸)五回、松島丸(一九九噸)五回、(三好)北海丸(二五五噸)四回、天京丸(一九六噸)四回(千島)第五日高丸(二二七噸)四回、第六日高丸(一九九噸)四回。

浦河海陸運送株式會社 資本金二萬圓、社長濱田定次郎氏、函館市渡島商船株式會社の代理店で、船舶名及び就航回数共益丸(一〇五噸)二回、渡島丸(一八五噸)二回、伊達丸(一九三噸)二回、尙此の外に臨時運航を爲す場合が少くない。

金融機關 としては、小樽市に本社を有する株式會社北海道銀行浦河支店がある。勿論地元金融機關として浦河信用組合、室蘭無盡株式會社浦河出張所等があるが、要するに局部的機關に過ぎない。



道江口右長支店 浦河浦河出張所 浦河浦河出張所

長支店 浦河浦河出張所 浦河浦河出張所

關に過ぎない。



連給女の松若 - エフカ



日高自動車株式會社

北海道銀行浦河支店の支店長は江口右一氏で、同店の昭和八年取扱ひ高は、

預金 預け高三五四八、五〇六圓、拂出高三四八一、〇六二圓
 貸出 貸付高四〇五、四六四圓、回收高三七九、八四三圓
 送金爲替取扱高 東京(送金取組高七七、八二四圓、送金支拂高四二二、二八八圓)青森(同一九、一一〇圓、同六九、七五七圓)小樽(同七七、四二〇圓、同三七七、九六七圓)札幌(同三三三、二二六圓、同五七四、四四一圓)函館(同九二〇、五三五圓、同五二〇、二七八圓)室蘭(同五六、四九三圓、同二九四、〇四四圓)其他各地(同一、一九六、二七八圓、同一、四五六、一八五圓)合計送金取扱高二、六七〇、八九六圓、送金支拂高三、七一四、九六三圓となつてゐる。

浦河郵便局 局長は町會議員の堺謙吉氏、二等局に比するも敢て遜色なき諸設備を有し、その電話系統を略記すれば、日高管内は勿論その最尖端は函館、岩内、美國、室蘭、噴火灣沿岸留萌、旭川、釧路に及び漁業根據地の通信機關としては完璧に近いものと云つて差支へない。

新聞社 報道機關として日刊日高民報、日高毎日新聞の兩社

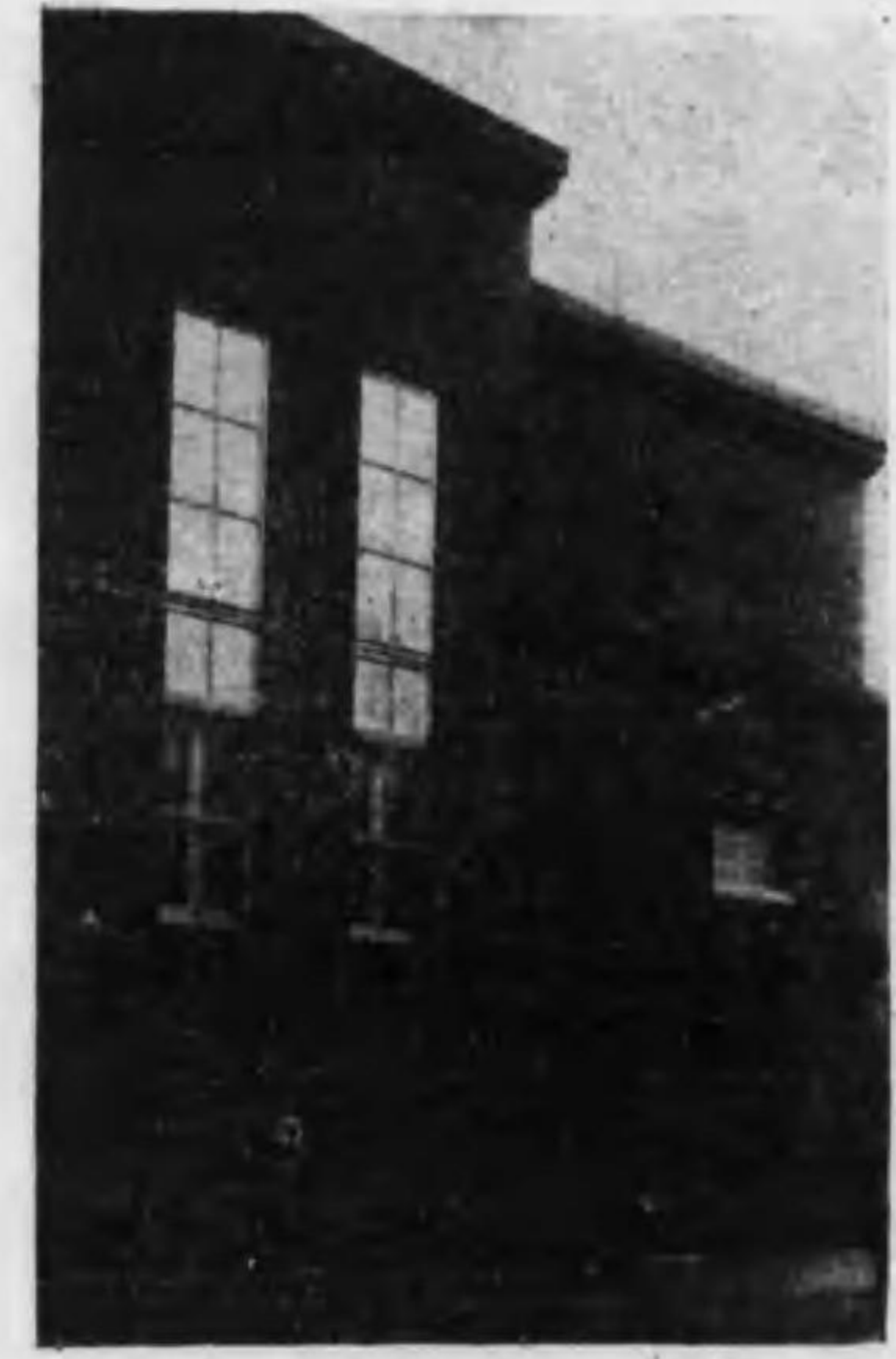
があり、このほかに室蘭毎日新聞、函館毎日新聞、函館新聞の支局及び北海タイムスの特置機關がある。

日高民報社 社長小林哲太郎氏の經營に係り、日高新聞以來久しきに亘る歴史を有す。平盤ロール印刷機二臺を有し發行部數三千。

日高毎日新聞社 社長竹島由太郎氏の個人經營、昭和七年末創刊以來未だ日は淺いが急速に讀者層へ喰ひ入り、現在の發行部數二千五百。

日高電燈株式會社 資本金六十五萬圓、本社東京市麹町區有樂町一丁目四番地、役員は社長岡崎

將次、専務取締役手塚信吉、取締役重盛、三三、石田充親、坂東秀太郎、監査役田中治之助、村岸助治郎、横山庄右衛門の諸氏、中東部日高一圓を營業區間とし、現在の點燈個數一萬三千十六燈、佐瑠太に於て勇拂電燈會社經由で王子の千歳發電所から受電し、浦河營業所を中樞機關として營業してゐるが、近き將來に於て様似郡幌滿川に發電所を創設し、以て



北海道銀行浦河支店



日高電燈浦河營業所

電力の自給を圖るべく目下計劃中である。

火防 衛生 醫療

火防 舊くから私設の消防組はあつたが、正式に消防組の組織を見たのは明治二十八年の事で、其の後明治四十一年と、大正十三年の兩回大火災に見舞はれ、其の都度市街中樞地の大半を烏有に歸するや、浦河町民は火防設備に對し漸く深甚なる注意を拂ふに至り、昭和六年谷万吉氏が獨力を以て數千金を投じて、浦河町の消防設備は急速に充實され、現在は自動車ポンプ二臺、ガソリンポンプ二臺、蒸汽ポンプ一臺、腕用ポンプ三臺を備へ、市中十三ヶ所に貯水栓を設備し、山田消防司令、奥田組頭統制のもとに部長三名、小頭七名、消防手六十七名、常備消防手五名が、一致團結、晝夜其の任に當つてゐる。

昨秋十月、大分縣下の一漁船が沖合に於て深夜船火事を起し、僚船に曳かれて浦河に入港した際

の如き、浦河消防組は逸早く出動し、水難救護所員と協力して消火救助に努め、同船をして發火機關部の小修理程度の被害を以て、大難を免れしめた如き一に消防組の敏速なる活動の賜ものと云ふ可きである。

火防思想の宣傳實行機關としては、田口忠之助氏が會長たる浦河火防組合、及び三澤ちよの夫人の會長たる火防衛生婦人會があり、共に相協力して熱心不斷の活動を續けてゐる。

尙この外舩谷樹藏氏の率ゆる親友會は、私設義勇消防として消火の傳統的精神を體する特殊團體で、過去二十年來幾多の功績を残してゐる。

衛生 地形の關係上浦河は飲用水に乏しく殊に鱒別一帯は泥炭地で自然脚氣等の病氣も多いとされてゐたが、排水工事の完備と共に



日高貨物自動車株式會社

北海通水産物検査所
浦河派出所主任技手
清水 奎次郎 氏



明治二十五年新潟縣西頸城郡磯部村に生れ、縣立能生水産學校製造科を卒業して水産界の人となる。一時東京に出で高貴な方の玄關子を勤めたこともあつたが、昔風な家令と衝突して其處を飛び出し、縁者を頼つて日高に來住日高水産會水産物検査員兼浦河漁業組合技手たること多年、昭和八年水産物の検査が北海道廳の手に移管せらるゝと共に現職に就任して今日に至る。氏は責任飽くまで剛直、職務を執行するに當つては大點一劃と雖もおろそかにせぬところから、一時は漁業者の反對を受け、非難迫害至らざる無き有様であつたが、遂に一步も譲歩せず、些も妥協せず、斷々乎として所信を遂行して憚らなかつた結果、浦河の水産物及び水産加工品は急速なる向上を遂げ、今日では管内水産物の標準品として、絶對的廉價を保持するに至つてゐる。

麟別は今や最も住心地よき住宅地と化し、昭和三年簡易水道が完成してからは、地元住民に對する水の問題も解決、本年は更に水道の擴大工事に依り、外來船舶への給水設備も整ふに至つた。季節的傳染病の豫防については、町役場、警察署、衛生組合が協力して萬全を期して居り、月寒の隔離病舎は新築したばかりで、設備も完全してゐる。蛔虫驅除劑「マクニン」の戸毎配布、塵芥、糞尿の取捨て汲取り等も衛生組合の手で遺憾なく勵行され、天惠の氣候と相俟つて現在の浦河は、

町立浦河病院



全道隨一の健康地と評されてゐる。

市中には別項の通り、三軒の錢湯と、八軒の理髮店と、六軒の髮結店と、七八軒の賣藥店が存してゐる。醫療 醫療機關としては、町立浦河病院をはじめ左の如き三



長院醫藤伊
氏 治 梯 藤 伊



長院病河浦立町
氏 郎 太 桂 部 渡



長院醫倉板
氏 一 貫 倉 板



長院醫川富
氏 涉 川 富

網谷藥局店主 網谷安治氏



氏は日高の新進實業家である。否既でに新進の域を超越して中堅的地歩を占めてゐると云つた方が適評であらう。
明治三十三年様似村に生れ、室蘭市武場小學校を卒業後、同市の奥村藥店に入つて具さに商店經營の實際を修得、大正十二年來浦河町大通三丁目に藥種商を開店、其の後特急的速度を以て店舖の發展擴大を計り、現在では藥種賣藥、化粧品、書籍雜誌、國定教科書等を販賣するほか藥局部、ラヂオ部を兼ね、日高貨物自動車株式會社監査役、浦河信用組合監事の職に在る。
氏の人格を一言にして評せば、明朗そのもの、如き文化的商人と云ふ事が出來やう。その網谷氏の經營する店舖は常に明るく、親切で顧客本位に徹底してゐる。

醫院、二齒科醫院があり、その外に産婆、按摩、電氣療法所等がある。



池田齒科醫院院長 池田三郎氏

- ◇町立浦河病院(電話七九番)院長醫學士 渡部桂太郎・藥劑師 渡部やぶ子、産婆 小田島ちよ子◇板倉醫院(電話一二四番) 院長醫學士 板倉貫一、産婆 大川まさを◇富川醫院(電話六八番) 院長 富川涉
- ◇伊藤醫院(電話四六番) 院長 伊藤梯治◇堤田齒科醫院 院長 堤田網男、副院長 奥田榮三 ◇池田齒科醫院 院長 池田三郎
- ◇個人開業産婆 棚橋きち子 鹿川和氣。山藤嘉彦 ◇藥局 網谷

藥局、朝倉藥局。

教育機關

尚北海道廳立浦河醫院があつて、主として舊土人の醫療に當り、浦河病院院長渡部醫學士が其處の囑託醫を兼ねてゐる。

浦河は北海道全道を通じ、最も開拓の歴史舊き町村の一であり、加ふるに溫和な氣候と豊富な資源とに恵まれてゐるが、惜しむらくは其の位置が南隅に僻在し、長く陸上交通の便を缺いてゐた爲め日高支廳の所在地であり乍ら、今日猶教育機關の完備せざるを遺憾とする。

現在浦河町管内には、浦河、西舎兩尋常高等小學校の外、杵臼、後柄、向別、井寒臺、繪笛の五尋常小學校があり、在籍兒童數は尋常科千八百名、高等科三百名で、町負擔の教育費は昭和八年度に於て、兒童一名當り金貳拾壹圓七拾七錢てふ數字



堤田齒科醫院



池田庄太郎 浦河小學校校長

を示してゐる。

男女青少年の教育機關としては浦河青年學校、浦河實踐女學校の二機關があるに過ぎず、前者の在學生徒數約百名、後者の在學生徒數約五十名、此の程度の教育課程を以て満足しない家庭では、何れも苦小牧、室蘭、函館、札幌等へ子弟を遊學させてゐる。

各村落小學校には夫々附屬の青年訓練所があつて、非常時日本に相應しい猛訓練を施してゐる。教育後援機關としては各小學校毎に兒童保護者會があり、また浦河青年學校は特別に後援會が設立され、浦河神社々司山内春見、堀田菊次郎の兩氏が其の正副會長に擧げられてゐる。



浦河消防所

圖書館 浦河町日高紀念館内に在る附屬圖書館は、日露戰役直後當時の浦河支廳長（現在は日高支廳）であつた西忠義

翁の主唱發起で創設されたもので、現在は日高教育會の所管となつてゐる。前年谷萬吉氏の建築寄附した其の新築閱覽室は、窓越しに浦河市街と港灣とが一眸のうちに收められ、圖書館としては稀れに見る景勝の地を占めてゐる。藏書五千巻中には貴重な古文獻も尠くない。家塾 最も家庭的な子女教育機關としては大友、木田、木下の三家塾があり、主として裁縫を教授してゐるが何れも數十名の塾生を擁してゐる。

町會議員 谷 萬吉氏



男の中の男とは、谷氏の爲めに作られた文字であるやうに思はれる位、氏は然諾を重んずる任侠の士である。土木建築請負業界に身を投じて三十餘年今日の氏は最早や單なる浦河の谷ではなく、北海道業界の代表的存在となつてゐる。

町會議員、日高自動車株式會社社長、日高贈振兩國同業組合の會長その他多くの公職と名譽職を兼ね、浦河の町政に對しては常に最後の發言權を持つてゐるにも拘らず聰明な氏は如何なる場合でも控へ目で、先き走つた態度など更に見受けられない。浦河町をはじめ各町村に氏が從來寄附寄進した金額は既に數萬圓の巨額に上つてゐる。

尚氏は現在日高十勝の兩國を結ぶ海岸道路の工事を引受け、渾身の努力を傾けてゐるが、之れが完成の曉は昭和の近藤重藏として、永く其の名を留むる事とならう。

背面地の産業

浦河港背面地の産業は説明するまでも無く農業、牧畜、林業が主たるもので、月寒川附近の砂金、白金採掘等鑛業も亦輕視すべからざるものがある。

然し其の中でも馬産地日高の中心地を爲す浦河の畜産即ち馬産業は、斷然農、林、鑛の諸業を壓倒するが如き隆盛を示し、昨秋十月大阪市に於て開催された全國馬匹博覽會に出陳した浦河町後鞆村日田安次郎氏生産の三歳牝馬第六豐宮號が二等賞の榮冠をかち得た如き、浦河馬産業の爲め萬丈の氣を吐いたものと云へやう。

浦河の産馬 往時松前藩吏が沿岸巡視の際、到る所に於て乗馬の必要を感じ、奥州南部から優秀な馬匹を移入放牧したのが抑々浦河馬の濫觴である。

明治二十二年輻崎清彦氏の發案で現在の日高種馬牧場用地に小字四ヶ村の共同放牧場を官より借受け使用中



森川運髮店



日高種馬牧場長 清水高氏

同三十七年馬政局の岸本技師が同共同牧場を視察した頃から國立牧場設置の議起り、生ける神として日高民の尊崇措かざる當時の支應長西忠義翁の幹旋努力が效を奏し、明治四十年日高種馬牧場の設置を見、業界に飛躍的轉機を來すに至つた。

現在浦河の馬匹總頭數は一、三〇五頭で、その内譯は乗用馬(サラ系、アラ系)二二六頭、輕挽馬系八三〇頭、重種系二三八頭、和種二二頭といふ數字を示してゐるが、就中輕挽馬は氣候、土質、育成方法の三者が併行完備し、到底他の追隨を許さざる程優秀なもので、乾燥せる四肢、筋骨並に脚の強靱、能力の優良等の諸點は既に馬産界に於て廣く認められた所である。



町會議員 廣木光五郎氏

廣木氏はニツクネームをライオンと謂ひ、浦河の名物的存在たるを失はない。性飽くまで勇猛にして自ら信ずるところを直言直行して憚らない。其の性格的象徴としてライオンの名は生れ來つたものらしいが、一面また瀟々たる雅氣を藏し、愛すべく敬すべく親し味深い老人である。

殆んど生れ付きと云つてもいい位の事業好きで、浦河に定住以來三十餘年氏の關與しない事業は無いと云つてもいい、程色んな仕事に携つて來た。現在は漁業家として牢固たる地歩を築き、町議たるのほか漁業組合監事、發動機漁船組合理事等の要職に在る。

昨秋重病を患つてからは心境一變、今後は一切の利己的打算と才に委せた術數を抛擲し、郷土の公僕として晩年を費ひやしたい意圖を有してゐるが、智あり才あり術ある廣木氏更生後の活躍は頼母しい。

町會議員 高津彌三吉氏



氏は日高水産界の元老であり、浦河町の智識者である。築港實現の爲めに多年奮闘した功勞者で、修築工事中は副事務所長の名を以て呼ばれた程熱心に側面から工事の完備促進を奮勵した事實は、今猶世人の記憶に新たなところである。
既で七十に近い高齢であり乍ら、壯者に譲らぬ健康と頭腦の明敏さを以て縦横に活躍、次々に新規計劃を樹て當局を鞭撻し、殆んど寧日なき有様である。

従つて農林省をはじめ、道廳、各府縣、軍馬補充部等各方面から購買され、毎年家畜市場開設期には多数の馬匹が道内は勿論、本土各府縣へ向け移出されてゐる。

水産界の回顧

漁族の多いのと、漁獲高の豊富を以て有名な、日高沿岸の漁況並に漁獲方法の變遷を、過去に遡つて回顧的に記述してみるのも無駄事でないと思ふ。

和人の浦河に來つて漁業に従事した歴史は相當舊いものであるが、明治時代に入り、現住者が初めて移住した當時に於ても、今日から考へると殆んど嘘の様な事實が少くない。
鱒、鮭の類は、産卵期になると産卵場所を求めて沿岸に流れ出る大小河川に遡上する習性を持つてゐる。

此の季節になると、川と名の付く川總てに鱒、鮭の魚群がたて込み、水面に魚背を露出し水の流れか魚の流れか判別し兼ねる状況を呈し、その中へ棒切れを突込むと、棒は直立した儘流れに逆ら

日高電燈株式会社 専務取締役 手塚信吉氏



手塚氏は東京に本據を持つ産業人で、氏の日高に對する關係は、鮭に於ける古池か田圃の如きものである。然しそれだけに氏の神經は常に鋭敏であり、其の鋭敏さを以て日高の進運に貢献しつゝある功績は、有形無形兩方面に亘り實に著大なものがある。
日高電燈の専務であり、日高産業研究所の所長であり、日高皇道青年會の會長であつて、地方産業の助成發達を圖る傍ら、人材の養成に不斷の努力を續けてゐる。最近では電力の自給を計る目的を以て、幌滿川の發電計劃を進めてゐるが、氏の本領は單なる産業人としてには無く、鑄て來らんとする時代の轉換期に際し、巨大な足跡を史上に印すべき素質と使命を兼ね備へた點にある。

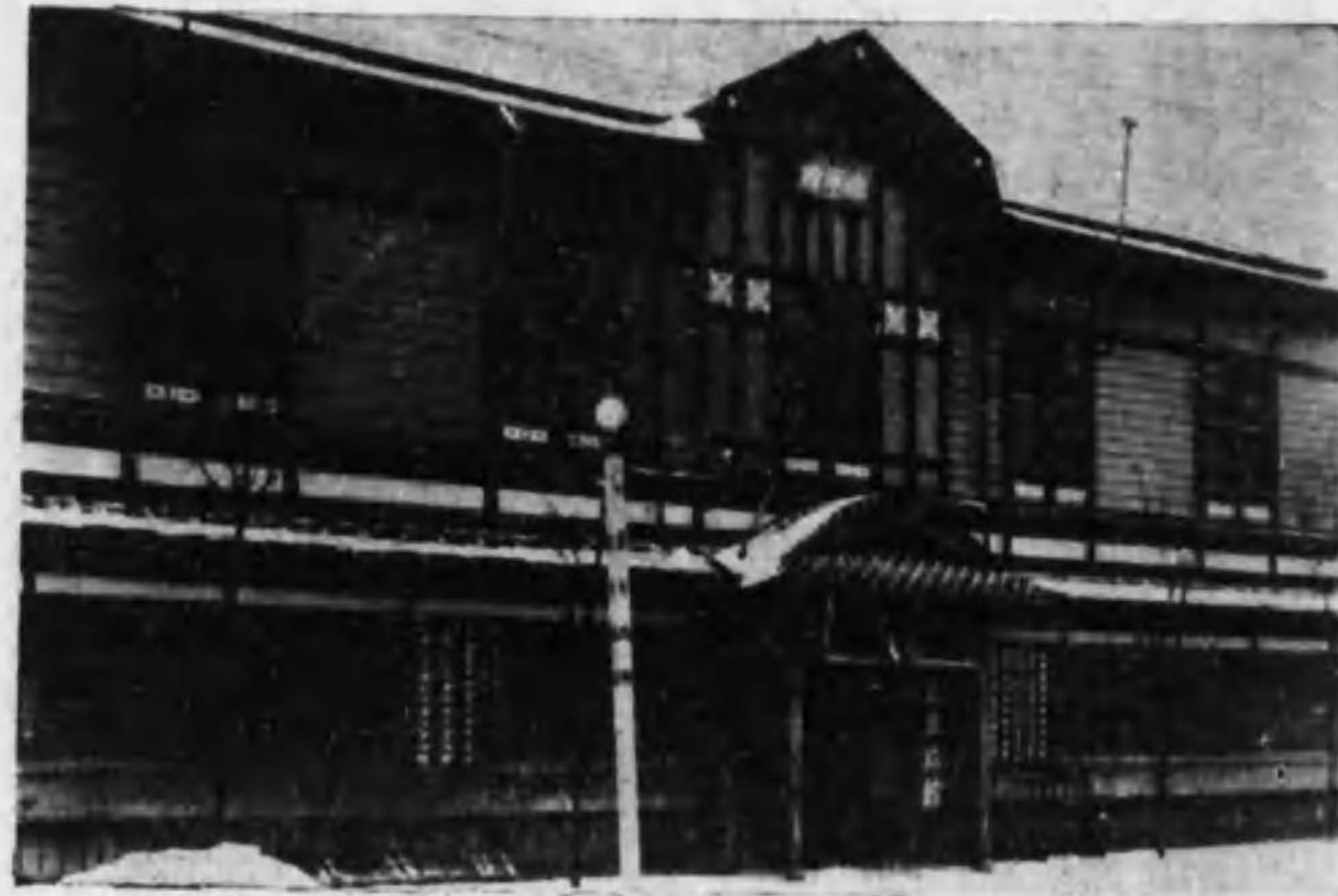
つて、川上へ押上げられたと云はれてゐる。

斯様な有様であるから、當時は何等の魚具を用ひず素手で鱒、鮭を自由に掴み取りする事が出来た。然し其の頃は浦河、函館間を小型帆船が月一回往復するに過ぎず、鹽類の供給の如きも従つて意に委せなかつた結果、折角獲つた魚類も、貯蔵の方法に窮し、鮭一尾の代償に草鞋一足を提供する者さへ無い有様であつた。

沿岸の海中に棲息する漁族も大體これと似通つたもので、目抜魚の如き極く近年まで二三人乗りの小舟を仕立て、呼べば聲の届く程の沿岸に、十五鉢か二十鉢の道繩を流しさへすれば、忽ち滿船するのを以て當然の事としてゐた。

數年來はどうしたものか全然姿を見せない夏鱈も、以前は大群を爲して岸近くまで押寄せ、明治三十二年頃は道繩を用ひ、其の後はネカジカ、鹽鱈、生鱈等の餌料を以て一本釣を爲し、之れを原料に大正十年頃までは、盛に節を製造して賣出したものである。

鱈の一本釣は明治三十八年の夏浦河漁業界の元老大石安太郎氏が房州飯岡町へ出掛け、熟練漁夫を雇入れて來て操業したのがそも／＼の始まりであるが、其の際飯岡の漁師町で、空釣繩を初めて



昇月旅館

見受けた同氏は、歸來此の漁法を鮭漁に應用した。生憎鮭は一尾も獲れなかつたが、思ひ掛けぬ章魚がポツ／＼引掛つたので、之れに力を得、工夫研究の末、章魚空釣繩なるものを完成した。大石老を元祖とする章魚の空釣は、其の後日高一圓に擴まり今日では全北海道は勿論、遠く樺太方面にまで廣く行はれてゐる。

鱈も昔から鮭同様無盡蔵に棲息してゐたものであるが、鱈は建網業者にのみ漁獲を許され、一般の漁師が鱈を獲ると没收される規定になつてゐた。然るに明治三十六年に二三建網業者以外の者が、鱈でも無ければ鮭でも無い、と當時認定された今日のランヤ鱈即ち時不知鮭を發見し、其の後は鱈も一般に漁獲

浦河漁業界の元老 大石安太郎氏



些かの掛値も無く大石さんは日高漁業界の元老だ。茫漠たる風手、泰の始皇を偲ばしむるが如き耳朶、氣が揉める程訥々たる其の談話振り等萬事印象的に出来てゐるが、それにも増して大きな大石さんの特徴は、太平洋の如く其の襟度の宏大な點である。

稚内に於ける鯔刺網漁業に失敗し、浦河に移り來つたのが明治三十四年、同三十九年から千葉縣型の改良川崎船を建造して獨立、爾來鮪の空釣繩、鯔の棹釣、鯔、鮪、鮪其の他の這繩、鮪、鮪流網漁業等常に業界の先驅者として不斷の精進を続け今日に及んでゐる。

曾て漁業組合監事、釣業組合長、發動機漁船組合長等の要職に歴任、現在は總代として浦河漁業組合の經營に參画してゐる。

を許す事となり、久しく延繩で鮪の大漁を續けたものある。

大正四年に及び北海道水産試験場室蘭支場が、日高國三石村で鮪流網の試験を行つて好成绩を收め、引續き浦河の大石安太郎、中村要藏の兩氏が、水産試験場の囑託を受けて流網漁業に従事し、これまた共に豫期以上の成績を挙げ、爾來日高沿岸一帯の鮪漁は、流網漁法に一變し今日に至つてゐるが、其の間中村氏は鮪を目的の流網を以て鯔を大漁し、思はぬ儲け物をしたてふ記録も残つてゐる。

鮪の流網は明治三十七八年頃、今は故人となつた浦河の池田安太郎氏や伊藤富次郎氏が奥泉貞作氏の後援を受け、越後から古網を買入れて試みたのを以て嚆矢とする。

最初是等の人々は角鮫を目的に流網を計劃した所、角鮫の大漁と共に豫期せぬ鮪の漁を見たものである。

角鮫は流網に依る以前繩釣で漁獲してゐたが、頗る豊漁で今から三四十年前の漁師は、角鮫と新鮪を獲つてゐさへすれば、一年中の生計に事欠かぬ呑氣さであつた。

浦河漁業組合理事 中村要藏氏



見るからに骨格のガツチリとした、如何にも漁業家らしいタイプの所有者で、廣い前額が氏の聰明さと思慮の周密さを物語つてゐる。

生國は新潟縣、明治三十八年二十一の若さで來道浦河に居を構へ、四十二年獨立してからは漁撈方法をはじめ漁具釣鈎の研究改良に心を致し、沖合の新規漁場を探索して同業者に漁撈上の利益を譲つ等氏の地元漁業界に残した功績は枚擧に遑ない程である。

昭和二年始めて發動機漁船を新造し、以來沖合海田の開拓に心血を注いでゐる。

大正二年この方鈎漁組合理事、漁業組合總代、發動機漁船組合理事等に擧げられ、複雑な問題の發生した場合は常にその斡旋役として重用されてゐる。

尙現在は漁業組合理事、浦河救難所救助長其の他の職に在る。

浦河警察署長 山田 蒨氏



相馬節の本場福島縣中村町の産で當年取つて三十八歳、若くして國後署長を勤め、其の後道廳警務課勤務、遠輕、由仁の各署長を経て昭和八年七月現職に就任、北海道廳警察部の新進である。職務遂行に當つては些かの私情をも挟まず、斷々乎として慣る所が無いが然し融通の利かぬ所謂淺噴漢ではなく、實嚴その宜しきを得、在任未だ久しからざるにも拘らず、地元各方面から絶對の信任を寄せられてゐる。浦河警察署管内には現在鐵道、道路工事に従事する土工が二千名近く入り込み、ともすれば殺伐な事故の發生し勝ちな諸條件を備へてゐるが、周到徹底せる山田署長の統制は、よくそれ等の事故を未前に防ぎ、地元住民に絶對安心を與へてゐる。

鰈類も豊漁で、鰈の刺網や川崎船を以てする手繰業も随分盛大に行はれたものであるが、機船底曳網の隆昌に伴ひ、現在では往時の何十分の一到に減少してしまつた。それでも室蘭港を根據とする底曳網機船が、今猶ドル箱としてゐる所をみると、日高沖合の鰈をはじめ魚族の如何に豊富であるか、首肯されやう。

小鯧、鰯の類は建網を以て漁獲し、肥料用の糞に炊いてゐる事は昔も今も變り無く、昨秋十一月の如き鰯の群が浦河を中心とした日高の沿岸一帯に押寄せ、六尺柄のタモを以て陸から自由に掬ひ

取る事が出来た迄はよかつたが、遂には砂濱に押上げられた鰯群を以て、高さ六七尺に及ぶ山を築き、其の延長實に二三里に及ぶに至つては、豊漁には敢て動ぜぬ地元漁民も只々呆然たるの外なく、鰯自體の重みで自然に紋り出された脂は、沖合遠く五六哩の海面を蔽ひ、海底に洄游棲息する魚族は、爲めに空氣の疏通を遮斷されて哀れにも窒息死、數十貫の鰯までがゴロン／＼と打ち上げられるてふ珍景を演出した。

日高の海藻類としては、改めて説明するを要しない程全国的に有名な三石昆布を筆頭に、銀杏草、ふのり等がある。

三石昆布とは日高に於て採取される昆布の學名で、今日では浦河町井寒産の昆布が最優良品とされ、是等海藻類の年産額は全日高を通じ毎年百萬圓内外に達してゐる。

加工品中、浦河名産として聲價の高い目拔鯛の粕漬は、明治



谷萬吉氏庭園圖

三十二年頃西川義三郎氏が製造を試み、東京方面へ移出したのが抑々の始まりである。

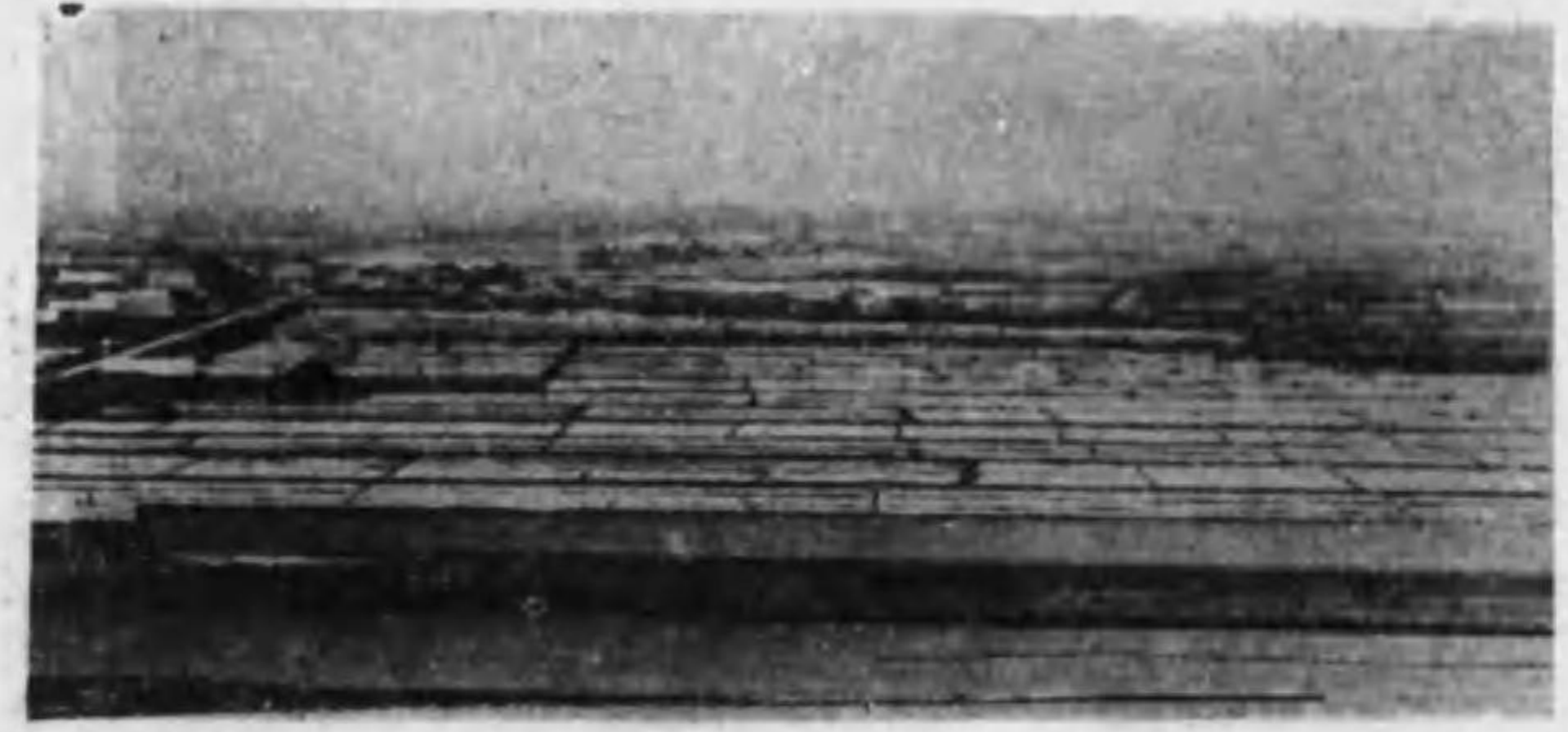
最初のもものは製法不馴れの爲め失敗に歸したが、其の後多くの人により改善工夫され、今日では断然他の類似品を壓倒してゐる。

酢章魚の製造は明治四十一年頃大澤某なる者が初めて手を染め、信州方面へ大量に送り出し大儲けしたのに發端してゐる。

今日では目抜鯛の粕漬、酢章魚共に全道的な加工製品となつてゐるが、何れも最初は浦河の熱心な漁業者の手で先驅的に着業工夫されたものである。

浦河の發動機漁業は極く近年の事に屬し、未だ十年そこゝの歴史しか有してゐない。

又鮎の流網は角鮫の不漁轉換策として昭和二年頃から力を入れ出したもので、漸年隆盛に赴きつゝあるが、先進地方に比較すれば今



白 杵

後更に改良を施さねばならぬ點多く、それだけに河浦の鮎漁は外來漁船として最も有望有利な事業であると云ふ事が出来る。

世界に冠絶する

日高沖合の漁場

日高の沿岸並に其の沖合が、世界に冠絶する大漁場である事は餘りにも有名な周知の事實であるが、日高の海岸線は概して屈曲に乏しく、漁船の安全を保證するに足る天然の港灣を缺いてゐた爲め、折角の漁場も久しく捨て、顧みられない憾みがあつた。近年發動機漁船の長足なる發達に伴ひ、釧路、室蘭、函館、鮫、釜石等の諸港を足場として、この漁場に出漁線業する漁船も逐年其の數を加へ來つたが、それとても根據地と漁場との距離遠隔に過ぎ、往復の航海に少なからぬ日數と燃料を空費しなければならぬ不便と不經濟とが



村 農



繪笛村中江農場

あり、時には暴風、雨雪の災害を蒙り悲惨な海の犠牲者を出す事すら稀有ではなかつたのである。

然るに昭和五年三月、前後十年の歳月と百四拾餘萬圓の國帑とを費ひやして辛苦修築した浦河漁港が竣功を告げ、天恵の大漁場に配するに人工の良港を以てするに至るや、俄然日高沖合の漁場は全國遠洋漁業家垂涎の地と化し、爾來僅かに三年を経過せるに過ぎざるにも拘らず、夏季より晩秋の交に亘る盛漁期の浦河港は帆船林立、爲めに被覆面積六萬五千餘坪の港内も狭隘を感じる盛況を呈するに至つてゐる。

日高沖合の漁場に洄游する魚族中特記すべきものは、鱒、鮭、鮭、柔魚、目拔魚、鱒、鱈、章魚等であるが、その洄游状況並に例年の漁況を概説すれば大要次の通りである。

鱒 毎年四月上旬から七月上旬に至る三ヶ月間を鱒の豊

漁期としてゐる。

種類はラシヤ鱒(時不知)本鱒、青鱒等で、その内ラシヤ鱒は漁獲高最も多く断然本鱒、青鱒の兩種を凌駕してゐる。

漁期の初めは鱒を餌料として釣り、漸次盛漁期に入るに従ひ、流網を以て漁獲する方法を採つてゐる地元漁業者が鱒の沖取りに着業したのは大正七年以降の事で、現在浦河を中心とした日高沿岸には、鱒漁に従事する漁船が約三百艘存在してゐる。その大部分は舊來の川崎船で、發動機漁船と雖も四馬力乃至二十馬力程度の機能を有するに過ぎないが、それでも漁期を通じ漁獲高四五千匹を越ゆる船も稀れないのである。



日高種馬牧場種馬ラマクマナン

然し公平に見て日高沿岸漁民の鱈漁は、その規模に於て、その操業技術に於て、共に未だ優秀完全とは評し難い點が少くない。従つて今後漁船漁具に改善を施し、操業上に工夫研究を凝らすに於ては、更に一段と好成績を挙げ得らるであらうと期待されてゐる。

鮪 日高沖合に於ける鮪漁は、漁期の長い事と、八九月の交小鮪の特に豊漁な事の二つを以てその特色としてゐる。

由來日高沿岸を洗ふ暖流即ち對馬海流は、對馬海峡より日本海に入り、同海東部を北東に流れ、其の一部が津輕海峡を抜けて日高沿岸に達し、寒流たる親潮と合するのである。黒潮は三陸地方の沖合より親潮の沖を幾派にも分れて北

然し公平に見て日高沿岸漁民の鱈漁は、その規模に於て、その操業技術に於て、共に未だ優



田 飼

上し、日高海岸に襲來する一方親潮と稱する寒流は、ペーリング海峡を南下して千島列島の南東側を流れ、更に南流して樺太海流の一派と合して根室半島より南西に流下し、釧路、十勝、日高の沿岸を洗ひ、襟裳岬沖合附近の洋上に於て暖流と相交錯するのである。是等海流と密接なる關係に在る鮪群は、六月下旬から十一月末頃まで暖流の卓越せると共に北上を続けるが、襟裳岬の南二十哩の沖合に於て寒流に阻止され、日高沖合に濃密なる群團を爲し、七八月暖流の漸く北上するに従ひ鮪の魚群は十勝、釧路遠くは南千島の色丹島附近に迄北上を続け、九月十月頃からは漸次寒流に壓せられ、魚群は南下して再び日高沖合に群集するのである。



場 牧

農家 嶺將 勝氏



安政元年南部藩士の家に生る。十八歳の時渡道、身を警察界に投じ、果進して浦河警察署主席警部となる。明治二十四年官を辭して向別村に引込み農耕に従ふ。其の後繪笛村に未墾地の拂下げを受けて轉住、現在では繪笛第一の大農場主である。明治二十七年の頃早くも水田耕作の有望なるを觀取し、率先してこれが試作に着手、苦心經營遂に繪笛村をして今日見るが如き水田村に築き上げた。

馬匹の飼育改良にも不斷の努力を拂ひ、その功没すべからざるものがある。従つて農業畜産の功勞者として從來表彰せらるゝこと一再ならず、斯界の先達者として絶對の尊信を蒐めてゐる。

以上略述した如き暖寒二潮流の關係に依り、日高沖合の漁場は長期に亘つて鮎群の洄游を見るのである。この漁場に於ける鮎漁は、大正二三年頃釧路港に根據を置く漁船に依つて開始され、其の後日高管内に普及し來つたものであるが、前にも述べた通り從來日高沿岸には一つとして港らしい港が無つた爲め、漁船の規模も従つて大なるもの無く、浦河港の竣功する迄は甚だ振はざる状態に在つた。現在でも地元漁船の鮎漁法は流網の一手で、浦河に船籍を有する漁船數は二十三隻で、延繩は宮崎、大分、紀州方面から出漁する漁船に限られてゐた。

偶々昨年九月、千葉縣和田町に本部を置く千葉縣突棒鮎漁同盟聯合會に所屬する突棒鮎漁船五十餘艘が、同會副會長鈴木喜三郎氏外數名の幹部指揮のもとに、大舉浦河に來航するに及び、茲に日高沖合の鮎漁は流網、延繩、突棒の三漁法が、夫々船籍地を異にする各地方の漁船に依り併用される事となつた。

千葉縣の突棒漁船五十餘艘が、昨秋浦河を根據として日高沖合に出漁した繰業日數は、其の最も長きものも十五日に過ぎず、中には漁獲物を釧路、鮫港等に運んで販賣した船もあつたから、其の漁獲高は些か明確を缺くが、浦河漁業組合附屬魚菜卸賣市場を経て、冷蔵船に賣却された總額金高

農家 嶋崎 清彦氏



嘉永四年松前藩の家老嶋崎家に生る。明治十四年札幌農學校を卒業、農商務省御用係、柄原農場管理人等を経て同二十年西舎村に創設された赤心社農場の管理人となる。後國有未開地を借受けて自立、四十年日高種馬牧場の創立と共に居を井寒家村宇繪笛に移し今日に及ぶ。氏は夙に農家の副業として畜産を普及せしむる事の必要を認め、之れが普及に盡瘁すること多年、又各種農産物の品種改良、品質統一に力を致す等、日高今日の農牧業が氏に負ふ所實に大なるものがある。

村議、町議その他農業畜産關係幾多の公職に擧げられ來つたが、近年は凡ての公職を辭し、平和な田園生活を楽しんでゐる。



臺燈脚裳襟

は四萬六千餘圓に達し、平均一艘當り九百六十四圓餘に上つて居り、第三號明神丸の如きは二千九拾五圓四拾錢てふ好成绩を擧げてゐる。

盛漁期を過ぎて廻航し而も初めて経験であるにも拘らず斯の如き成績を収めた千葉縣突棒

鮪漁船同盟では、今夏は昨年に倍する漁船を日高沖合に廻航せしめ、浦河港を根據地として本格的に鮪の突棒漁に従事する事になつてゐる由であるが、斯くして本年の浦河港は空前の殷盛を極める事であらうと期待されてゐる。

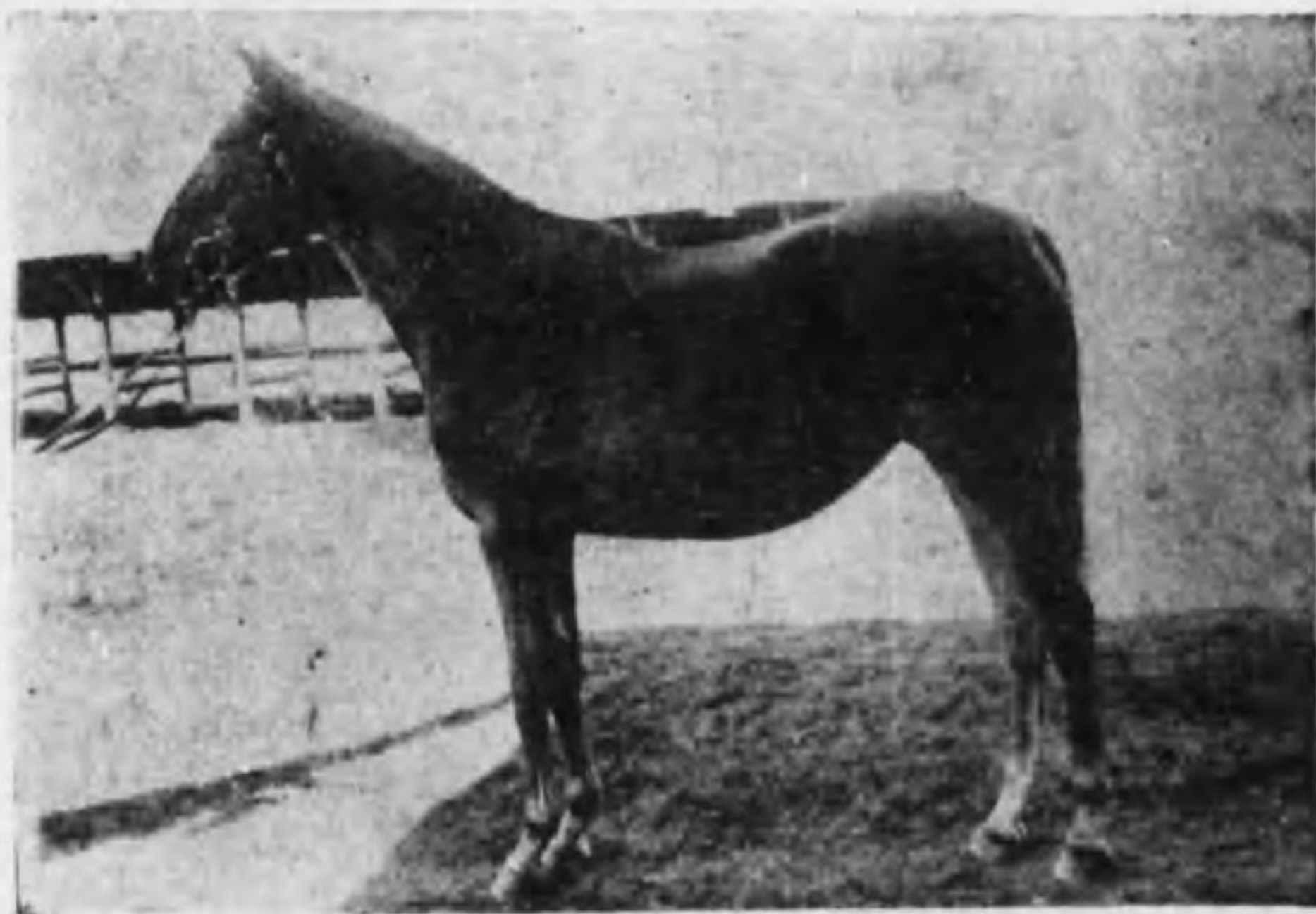
鱈・鱈は日高沖合九十尋乃至百八十尋の箇所に棲息し、漁期は大體十一月上旬から翌年の五月下旬迄である。

浦河港を本據とする發動機船二十餘隻は、鮪漁の終了と共に鱈漁に替るを常とし、漁具は延繩を使用してゐる。

柔魚 日高沖合で漁獲される柔魚は「するめいか」で、漁場は距岸十漚以内を主とし、九月から十一月中旬迄が其の漁期である。漁具はトンボ或はハネグを用ひ釣つてゐる。

目拔魚 目拔魚は日高沖合水深百五十尋乃至四百尋の箇所を漁場とし、襟裳岬沖合が最も好漁場とされてゐる。漁期は一月下旬から五月末迄である。

章魚 日高沖合一帯は章魚の棲息處多にして、漁期は十月上旬から翌年三月下旬迄である。漁具は空釣繩と稱し餌料を懸けない釣針を以てする延繩を主としてゐる。日高の鰈漁は機船底曳網の爲めに亂獲され、近時漸く



號宮豊六第有所氏田日



浦河馬市の景

漁場の荒廢を氣遣はるゝに至つてゐるが、室蘭を根據とする機船に依り、十一月以降翌年三月迄線業、今猶相當の漁獲高を示してゐる。

日高の地元漁業者間では未だ閑却されてゐるが、七月から十月にかけて秋刀魚、鱈、鯖等の來游も夥しいのであるから、是等の沖取漁業も將來有望で、現に浦河町高津彌三吉氏は昨年機船二艘を以て中羽鱈の旋網漁業一ヶ統を着業し好成績を収めてゐる。

沿岸漁業たる定置漁業は五、六兩月は鯨、七、八兩月は鰹、九月から十二月上旬までは鮭の漁獲あり、其統數は必ずしも多くは無いが、孰れも尠少ならざる年産額を揚げてゐる。

浦河港の利用效果

浦河港は釧路、室蘭兩港の中間に位置する北海道南部唯一の避難港であるばかりでなく、日高沖合の漁場を控へ、最も天恵豊かな漁業根據地であると同時に、冷蔵船の根據地をも兼ね、漁獲物の集散地としても絶對優位を占めてゐる。

北海道地圖を一瞥すれば直ちに諒解される如く、浦河港を起點として釧路、室蘭及び青森縣の鮫港に至る海上運數は、釧路（一〇七哩）その所要航海時十五時間、室蘭（八八哩）その所要航海時十三時間、鮫港（一〇哩）その所要航海時十七時間、斯の如く浦河港は日高沖合の漁場根據地として釧路、室蘭、鮫三港の殆んど中央に位置する關係上、外來漁船にして浦河港を根據地とするときは、何れの沖合に魚群洄游すとの急



海濱數里に築く鱈の山



人美のマイア

二、冷蔵船の廻航頻繁にして、漁獲物を有利高價に販賣し得ること。

三、鐵道輸送の途が開けつゝあること。

四、燃料をはじめ必需物資の供給が圓滑で、而も低廉であること。

五、地元町民の民風が純朴で、外來船に對しては舉町的奉仕の實を示しつゝあること。

等々の事實に照し、他船が浦河港を根據地として操業に従事することは、獨り採算上有利なばかりでなく、乗組員に及ぼす精神的影響も亦看過すべからざるものがあらうと確信する。

浦河在住漁業者も、曾ては外來船を敬遠せんとする傾向なしとなしなかつたが、交渉の度重なるにつれ、外來船は我等の漁場を侵略するものであるとの偏見を捨て、今日では反對に、外來

報に接するも、直ちに短時間を以て目的地へ進出する事が出来而も屢々説述した通り、鮪漁期の最も長い日高沖合漁場とは指呼の間に在る事でもあるから、此處を足場として操業することの有益である事は、今更多言を要せざる所であるが、念のため重ねてその理由を列擧すれば、

一、漁場に接近してゐる爲め往復の時間と燃料が經濟になること。

二、往復の航海時間が短い爲め漁獲物の品傷みが少く、従つて魚價の高價であること。

三、暴風その他荒天の齎す船舶人命の危険が皆無に近いこと等を數へる事が出来、更に又

一、漁業者を主體とする漁業組合經營附屬魚菜卸賣市場の完備してゐること。



室居の其と長酋のマイア

船の來航は我等を奮起啓發して呉れるよき刺戟である、故に我等は廣く他船の來航を歓迎し、相携へて無盡の寶庫たる洋上の海田を開拓しなければならぬてふ積極進取、協力共榮、眞に推稱すべき漁業者魂に燃え立つてゐる。

従つて外來船は、海山幾百里を距つ浦河に在り乍らも、故郷の港に於けると同様、何等の旅愁をも覺ゆる事なく、愉快に精一ばい活動出来るであらう事を信じて疑はない。

表紙「浦河港大觀」の題字は、日高の大恩人西忠義翁が、重患を冒し御揮毫下したものである。茲に謹んで感謝の意を表す。

浦河港大觀（終）

昭和九年三月五日 印刷
昭和九年三月十日 發行

【非 賣 品】

北海道日高國浦河町
印刷發行人 舛 谷 榊 藏
東京市京橋區築地二丁目五番地
印刷所 川崎活版印刷所
北海道日高國浦河町
發行所 浦河漁業組合

終

